釧路短期大学幼児教育学科









第2号

2019 (平成 31) 年 3 月 30 日発行

目次

<授業実践>

学生は施設実習で何を学ぶのか

一本学科における実習後のアンケート結果から 第2報一

井上 薫・吉川修・穴水ゆかり・岩野布美子・白川和希・進藤信子・篠木真紀…1

小学校におけるプログラミング教育の展開について

―カリキュラム・マネジメントの視点から―

竹ヶ原 康弘…24

<2018 (平成 30) 年度事業報告>

2018 年度 KJC ランドの運営を振り返って 第1報

―学生を対象としたアンケート調査結果から―

穴水ゆかり・篠木真紀・岩野布美子・白川和希・進藤信子・吉川修・井上薫…40

2018 年度 KJC ランドの運営を振り返って 第2報

―来場者を対象としたアンケート調査結果から―

穴水ゆかり・篠木真紀・岩野布美子・白川和希・進藤信子・吉川修・井上薫…52

2018年度 KJC ランドの活動内容(報告)

学生は施設実習で何を学ぶのか --本学科における実習後のアンケート結果から 第2報---

井上薫i・吉川修ⁱⁱ・穴水ゆかりⁱⁱⁱ・岩野布美子^{iv}・白川和希^v・進藤信子^{vi}・篠木真紀^{vii}

1. はじめに

(1)本報告の課題と背景

本報告は、保育士資格に必須な施設実習(概ね 10 日間以上)iを終えた本学 2 年生に対して行ったアンケートの結果をまとめたものである。前報である『釧路短期大学幼児教育学科実践報告』ii では教育実習(幼稚園実習)の成果と課題を検討したが、今回は施設実習を対象とした。前報同様、学生がどのような条件下で実習生として過ごし、何を学んでいるのか。日々の利用者とのかかわりから、実習先の指導者から、何を学べたのか。実習前後で実習施設やその働きに対する考えの変化について、どのような特徴を見出すことができるか。そして、課題は何かを明らかにしたい。

本学は 17 万人余の人口を有する道東(北海道東部)地域の拠点である釧路市にあり、2018/平成 30 年度の実習生は、幼児教育学科定員(50 名、本年度 2 年次在籍者も 50 名)の 72%が釧路市内出身者、その他では釧路振興局管内が 16%、根室管内 8%、オホーツクおよび十勝管内はそれぞれ 2%であった。つまり、ほとんどが釧路市および釧路・根室管内の出身者であり、近年この傾向が続いている。

ところで、大半の学生の出身地である釧路・根室管内における関連実習施設の状況だが、 児童養護施設は釧路に 1 箇所、発達支援センターは各市町村に置かれているが、本学の実 習で委託の実績があるのは釧路市および隣接町各 1 にとどまっている。また、障害児入所 施設は別な隣接町に1という状況で、これらの施設へ時期を2期に分けて対応するものの、 多くの学生は地域にある障害者入所施設か、日高山脈を越えて札幌や振興局管外へ出向く などして実習を行っている。そもそも北海道内に乳児院は2つ、児童養護施設は23施設等 という状況であるため、必ずしも本人の希望にかなった実習先になるとは限らない。

保育者・保育士を目指して本校に入学する場合、既に指摘されてきているように、大半の学生は保育所以外での各種施設での就職を想定していないという事情はほぼ同様であるiii。 しかし、保育士は、保育所以外にも広く児童(現在の「少年」定義である 18 歳まで)の養護を行う児童福祉施設での働きを求められており、近年、児童福祉法に定められた多様な施

i 幼児教育学科教授/1,4 執筆 ii 幼児教育学科准教授/3(2)執筆 iii 幼児教育学科専任講師/2,3(1)(3)(4)(6)(7)執筆 iv 幼児教育学科教授/3(5),4(1)(2)執筆 v 幼児教育学科専任講師 vi 幼児教育学科教授 vii 幼児教育学科専任講師

設も含めて、その働きはますます多様化している。実習対象の施設については「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」iv の別紙 2「保育実習実施基準」の備考 1 (A)の「及び」以下に定められており、、実習では必ずこれらのいずれかで実習を行う。

(2)実習指導、実習とキャリア教育

学生の多くは身近に関係者がいるか、ボランティア活動をしていない限り、施設での生活などを知らなくても不思議ではない。また、障碍の有無やその程度、施設の種別によっても内容は大きく異なる。そのため、本学では、1年次6月上旬に1泊2日の施設研修旅行を実施している。施設側にもご協力いただき、利用者とのレクリエーションや作業をグループ単位で行えるよう設定をお願いすると、学生たちは、最初は戸惑っていても、ボランティア活動などで支援の経験がある学生の様子を真似ながら、試行錯誤しながらかかわろうとすることが貴重な機会となっていく。他方、本学では2年生の実習終了後に、幼稚園(7月)、保育所(10月)、施設(10月後半)の各実習報告会を実習生に課し、これを必ず聞くように1年生に課している。毎年の実習先にそれほど変化がないのは、施設研修旅行で行ったことがあるなどの実体験や、先輩情報のある施設の方が心配も少なく選択しやすいのであろうと想像する。

前述のように、児童関係の施設が限られているために起こる状況は、北海道にある 30 弱の保育士養成校でもおそらく共通に感じていることであろう。他方、施設側の立場からすると、30 弱であろうと、各養成校が独自の方式で実習内容を求めると、それぞれへの要望・要求ごと対応を変えるのは難しい。北海道では、全国保育士養成協議会に加盟している保育士養成校で、北海道ブロック協議会を形成し、定期的な会合を持っているが、これらの諸問題へも対応を行ってきた。具体的には、加盟校の 1 単位当たりの実習費の金額および施設実習公文書による依頼日の統一を進める一方vi、道内の養成校がそれぞれ独自様式の記録や指導を施設に求めていたことから生じた施設側の負担(養成校毎に対応を変えねばならないこと)を減らせないかと、2002/平成 14 年以来、これらの内容について簡素化、統一の模索を始めvii、同協議会の研究班が中心となって、福祉施設の評価表の統一、日誌の統一、そして 2008/平成 20 年 2 月、『福祉施設実習ガイドライン(福祉施設実習編)』(全国保育士養成協議会北海道ブロック協議会編)の発行にたどり着いたviii。現在は第 3 版の改訂版を用いているix。

このガイドラインでは、実習の目的を、「大学で学んでいる子ども観や保育観、講義等で習得した知識・技術・技能」を「体験を通して」「具体的に総合的に」「身につけ」、「実習現場の指導によって深く学びとる」こととしている*。多様な「施設実習内容」(第4章)については、大きく「社会的養護施設」と「障害児(者)関係施設」に区分して、関係施設の種類ごとに①法的位置づけ、②施設の現状、③道内の施設を簡潔に示したのち、関係施設での実習の特徴、実習のポイント、関係施設実習の一日の流れ(統一日誌の形式で例示)が示されており、この章は、実習先によって学生各自で選択的に学ぶこともできる。さらに、記録の書き方、実習生の注意・心得、実習終了後の整理、そして「補遺」として、「実習施

設からの要望」と「後輩への実習アドバイス」が、それぞれ番号等が振られた短い文章でま とめられ、読みやすく、留意のための指示もしやすくなっている。

北海道ブロック協議会では、2月に全道の養成校が集う会合の折に、実習生を受け入れる保育関係団体、施設関係団体の代表または役員を招き、保育実習連絡協議会を行っており、近年の困った実習生の事例や職員不足、利用者を取り巻く家庭事情の深刻化などの課題や提言を受ける機会を設けている。保育現場もそうであるが、施設現場も担い手を欲しており、養成校との相互の連絡や実習を含めた交流、体験の場を通して、現場を知ってほしいと考えている。現場と養成校との協働で、課題意識を持った保育者・保育士養成を進めるためにも、実習現場で実習生として学生たちが感じた達成感、困り感をしっかりと受けとめたい。また、限られた現場との接点の在り方を改善していくためにも、アンケートが有効に用いられればと願う。

2. 調査方法

(1)調査協力者

本調査は2018年8~9月に行われた施設実習に参加した本学幼児教育学科2年次の学生48名(男子2名、女子46名)を対象とした。

(2)調査の時期と方法

2018年10月、施設実習終了後の授業時に自記式質問紙調査用紙を配布し、教務学生課に設置されたボックスに提出するよう指示した。36名から回収された(回収率78.3%)。

3. 調査結果

(1)実習時間について:勤務体制と残業について

指定保育士養成施設については、児童福祉法第 18 条の 6、児童福祉法施行令第 5 条、第 6 条の 2~8 等に規定されている。これらに基づき、保育実習Ⅲ (施設実習) の実習時間は「指定保育士養成施設の指定及び運営に関する基準」(平成 27 年 3 月 31 日厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知) のうちの「保育実習実施基準」にて、80 時間以上かつ. 10 日間以上と規定されている。

本学実習生の受け入れ施設の施設形態は、たとえば障がい者入所施設だけでも多機能型 通所施設、施設入所支援、生活介護、短期入所、日中一時支援…とさまざまである。また、 休憩時間設定時間や扱い等も施設により異なるため、実習期間中の学生の拘束時間も施設 により異なるのではと考えられた。また、公共交通機関の利便性が低い地域にある施設では、 出退勤時間によっては学生の通勤が難しくなる場合がある。今年度も早朝勤務に間に合わ ないため、数日は出勤のため営業車を利用したという学生もみられた。

以上の状況から学生の実習時間にかかわる実態を把握するため、実習時間にかかわる設

問を設けた。

利用児・者が毎日通ってくる施設では、学生の出退勤時間は毎日同じだが、入所型施設では職員の勤務が24時間体制のため実習もシフト制となっている(表1)。

調査結果によると、入所型である A 障がい者入所施設では、実習生に夜勤を課していないが、学生は泊まり込みで実習を行うため、夜勤のようすを目にする機会はあったようだ。

公的施設である発達支援センターを例にとると、A 施設では 8 時 50 分出勤、17 時退勤で、B 施設では 8 時 45 分出勤、17 時 30 分退勤となっている。これは休憩時間の長さによるものと考えられる。

また、幼稚園や保育園での実習は一斉に開始、終了となるが、週末や祝日は休業する通所施設と、利用児・者が暮らす施設では職員の休日のとり方が異なるため、施設実習の開始・終了日は施設により異なっている。お盆休みや祝日などを挟むため、年によっては前期授業の終了前に施設実習が開始する可能性もあるだろう。

表1 各施設の勤務体制

施設	勤務体制	シフト数	始業時刻	終業時刻	備考
A 児童養護施設	シフト制	3			
B児童養護施設	シフト制	5			6:00、21:30 の出勤あり
C児童養護施設	シフト制	2			
A 発達支援センター	定時制		8:50	17:00	
B発達支援センター	定時制		8:45	17:30	
A障がい児入所施設	シフト制	3			
B障がい児入所施設	シフト制	4			
A障がい者入所施設	シフト制	2			7:45-15:45, 8:45-17:45
B障がい者入所施設	シフト制	3			
C障がい者入所施設	定時制		9:00	17:00	
D障がい者入所施設	定時制		9:00	17:30	
E 障がい者入所施設	定時制		8:30	17:00	
F障がい者入所施設	定時制		7:45	17:00	

表 2 の通り、「30 分以上退勤時間が遅くなった日がある」学生は約 2 割の 17.1%名だが、いずれも 1 回のみだった。おもな理由は「友人を待っていた」だった。

2018 年 2 月発行の本ホームページ掲載 「実践報告書」によると、幼稚園実習では 学生の 64.9%が残務しており、10 回以上残

表2 30分以上退勤時間が遅くなったこと 人(%)

	なかった	あった
児童養護施設	3(75.0)	1(25.0)
発達支援センター	5(71.4)	2(28.6)
障がい児入所施設	3(100.0)	0(0.0)
障がい者入所施設	18(85.7)	3(14.3)
計	29(82.9)	6(17.1)

っていた学生は33.3%だったが、施設では定時帰宅が通常のことになっていた。

(2) 日誌と指導案について

1)日誌について:実習先から受けた指導の状況

表3の「日誌の誤字脱字に対する指導の状況」について、「指摘されなかった」と回答 した学生は30.6%であった。個人によって誤字脱字の多さに違いはあるだろうが、70%弱 の学生は、誤字脱字の指摘を受けているのが現実である。

学生一人一人の日誌を観ると、丁寧に記述されている日誌も多いが、誤字脱字だけでは なく、適切ではない表現も多く散見される。また、文章のまとまりを意識した改行が正し くされておらず、読みにくい日誌もみられた。加えて、日誌の内容を踏まえた担当保育者 からの指導記述に対し、翌日の保育実習に生かすことができず、日誌にも反省として記述 されない状況もある。

再提出を求めている施設は半 数に満たない 41.7%だった。子ど もの発達段階を捉えた成長のた め、記録が重要視される保育現場 において、大学での事前指導の充 実はもちろんだが、実習指導者に も厳しく再提出を求めることを お願いしたい。

表3 日誌の誤字脱字に対する指導の状況

人(%)

	訂正後再提出	再提出不要	指摘なし
児童養護施設	1(25.0)	0(0.0)	3(75.0)
発達支援センター	6(85.7)	0(0.0)	1(14.3)
障がい児入所施設	2(66.7)	0(0.0)	1(33.3)
障がい者入所施設	6(27.3)	10(45.5)	6(27.3)
計	15(41.7)	10(27.8)	11(30.6)

表 4 「日誌の修正方法」に 表4 日誌の修正方法 ついては「二重線と訂正印」 が 19.4%となり、正式な修正 方法を求めている施設が一 番多かった。

人(%)

	修正テープ等	二重線と訂正印	いずれも可
児童養護施設	1(25.0)	0(0.0)	0(0.0)
発達支援センター	0(0.0)	5(71.4)	0(0.0)
障がい児入所施設	1(33.3)	0(0.0)	0(0.0)
障がい者入所施設	3(13.6)	2(9.1)	1(4.5)
計	5(13.9)	7(19.4)	1(2.8)

2)指導案を書いたことの有無について

表 5 の通り、部分実習やレクリエーション指導等に際して、指導案を作成せずに実施し た学生は1名のみだった。「作成した」47.2%、「作成しなかった(部分実習やレクリエーシ ョンを行わなかった)」50.0%はいずれもほぼ半数だった。

	作成した	作成しなかった	作成せず実施
児童養護施設	0(0.0)	4(100.0)	0(0.0)
発達支援センター	7(100.0)	00.0	0(0.0)
障がい児入所施設	2(66.7)	1(33.3)	0(0.0)
障がい者入所施設	8(36.4)	13(59.1)	1(4.5)
計	17(47.2)	18(50.0)	1(2.8)

(3)実習先の保育者(指導者・職員)について

1)保育者の指導について

94.5%の学生がわからないこと等があったときには「実習施設の職員に質問することができた」と回答した(表

6) 。

人手不足や業務の多さ等による現場職員の忙しさは周知の通りだが、表7の通り本調査でも「わからなかったことを訊くことができなかった」原因について「忙しそうで、聞ける雰囲気ではなかった」と答えた学生がいた。

表 6 実習施設の職員にわからないことを質問できたか 人(%)

	割けた	だいたい	あまり
	訊けた	訊けた	訊けなかった
児童養護施設	2(50.0)	2(50.0)	0(0.0)
発達支援センター	3(42.9)	3(42.9)	1(14.3)
障がい児入所施設	2(66.7)	1(33.3)	0(0.0)
障がい者入所施設	1(72.7)	5(22.7)	1(4.5)
	23(63.9)	11(30.6)	2(5.6)

表 7 わからなかったことを訊くことができなかった理由 (おもな回答)

- ・忙しそうで、聞ける雰囲気ではなかった。
- 反省会がほとんどなかった。

2)保育者からの声かけ

「職員に励まされたことやうれしかったこと(表 8)」からは、学生は保育士のみならずさまざまな立場の施設職員から、緊張や不安などの想いを理解され、気遣われながら実習を進められていったようすがうかがわれた。

施設実習では日常の生活や活動を通してさまざまな利用児・者とかかわり、また、ひとつのフロアや寮に滞在することによって一人一人とかかわりをもつことになる。このため、授業やイベント時のボランティア活動では気づかなかった、利用児・者とのかかわり方や特性などへの疑問等について、現場で話を聞き、助言を受けることが貴重な学びの時間となる。また、この項目に対する回答からは、慣れない現場での緊張や戸惑いを理解して、学生の話や相談に耳を傾けていただいた感謝の気持ちが読み取れる。さらに自分の仕事ぶりや長所を評価され、努力や成長を認められることによって学生の実習に対するモチ

ベーションが上がったようだ。保育士・職員に対する感謝の気持ちとともに、回答者である知識や技術が不足していたとしても、学生たちも真摯に実習を行おうとしていたようすがうかがえる。

一方、「職員の指導に関して困ったこと(表 9)」については、学生は実習生としての立場をわきまえて臨んでいたのかと疑問を感じる記述や、特に施設職員については、実際にそのような状況があったのか、客観的には別の受け取り方ができる場面であったのか判断できない記述もあった。が、まずは実習前指導の際に、指導保育士や職員に「質問できない」「指導を受けにくい」ことを含めて、実習現場で困った状況があり、実習先に相談できないことがあれば、まずはそのことを巡回の教員に相談するようにしっかり伝えておく必要があるだろう。

実習生を送り出した教員としては、これまでの指導の中で、実習生としての立場を十分な自覚をもたせてきたのかを深く反省するべき結果でもあった。

表8 職員の方に励まされたこと、うれしかったこと(おもな回答)

〈指導のあり方〉(8件)

- ・質問や助言のための時間をつくってくれた
- 相談にのってくれた。
- ・担当以外の職員からも話を聞くことができた。
- ・利用児・者とのかかわり方や特性等についてアドバイスを受けた。(5)

〈職員による気遣い〉 (5件)

- わからないことがあれば何でも聞いてくださいと言われた。
- ・話や相談する際に真摯に向き合ってくれた
- ・ほとんどの職員が親切で質問しやすかった。
- ・緊張していることを理解してくれた。
- ・男性寮を担当したため、職員が心配してくれた。

〈保育者としてのよい点・実習を通じた成長〉 (16件)

- ・実習生の長所を認めたうえで、励まされた。(2)
- ・保育士としての能力や利用児者との接し方等についてほめられた。(7)
- ・実習に臨む態度や実習中の成長ぶりについて、よい点を伝えられた。(7)

表 9 指導に関して困ったこと等(おもな回答)

〈指導のあり方〉(6件)

- ・質問に対する言い方がよいものではなく、聞きたくても聞けなかった。
- ・わからないことは聞けと言われたが、聞くと自分で考えろと言われた。
- ・作業についての説明が少ない、わからない
- ・質問をしたときに、答えがあいまいな表現だった。

- ・反省会や、指導を受ける場面がほとんどなかった。
- ・指導点が多くある日誌を実習後に渡されて困った。

〈職員間の連携、指導の不一致〉(4件)

- ・職員によって、指導の内容や指導法が異なった。(2)
- ・仕事はないといわれて利用者さんと話していると、「お仕事してね」と別の職員から言われた。
- ・「報告・連絡・相談」をしていたつもりだったが、(直接伝えた)職員以外には伝わっていなかった。

〈職員について〉 (4件)

- ・指導者としてふさわしくないと思われる言い方をする職員がいた。
- ・ (自分以外の) 実習生の指導案に対して全否定している姿に驚き、見ていてショックを受けた。
- ・職員の言葉遣いや言いまわしが少しきつかったときもあった。
- ・職員から「アドバイスを欲しい」と言われた。質問の意図もわからなかった。

(4)実習の内容について

- 1)実習を経験して
- ①実習で経験してよかったこと

事前指導では、保育園や幼稚園で障がいのある乳幼児とのかかわりや援助について考えるうえでも学ぶべきことがあると伝えていた。このことをどの程度意識していたのか定かではないが、利用児・者とのかかわりや、そのかかわりを通じての学び、施設や障がいに対する学びなど、体験や経験を通じた学びに関する記述が多くみられた(表10)。

表 10 実習で経験してよかったこと(主な回答)

〈利用児・者とのかかわりと、かかわりを通じた学び〉(15件)

- ・障害をもつ利用児・者と(長い時間)かかわることができた。(11)
- ・利用者により活動が違うことを知り、一緒に作業をしたり、普通の生活では経験しないようなこと を経験することができよかったと思う。
- ・さまざまな行事に参加できた
- ・全体外出(寮ごとに外出する日)への参加
- ・夜勤 (によって、1日を通して関われた)

〈施設や障がいに対して学んだこと〉(18件)

- ・障害をもつ利用児・者とのかかわり方を学ぶことができた。(2)
- ・施設の仕事の内容を知ることができた。
- ・障害について、個人差があることを学び、個々への対応を経験できた。
- ・障害をもった方とのコミュニケーション(2)
- ・障害があってもいろいろな方法でコミュニケーションがとれること(を知ったこと)。
- ・視覚支援を実際に見たり、経験することができた。

- 1日の流れを知ることができた。
- ・食事、水分補給、入浴等の介助と留意すること(4)
- ・障害についての視野が広がった。
- ・指導案を書いて保育を行ったが、実習をしていなければわからなかった課題等が得られた
- ・おむつ替え、授乳、介助など、乳児とのかかわり方
- ・車椅子などいろいろな道具・用具を知ることができた
- ・1人1人、して良いことと悪いことがあること。

〈その他〉(2件)

- ・社会の厳しさを改めて思い出した
- 全部楽しかった
- ・掃除への興味がわいた(自分の部屋もきれいにしよう等)

②実習で大変だったこと、困ったこと

表11の通り、最も多かったのは、利用児・者とのかかわりやコミュニケーションの難しさに関するものだった。知識不足によって大変さを感じたと記述した学生もみられた。かかわりの楽しさ、あるいは楽しさよりも困難さを感じた学生は、利用児・者にかかわり、気持ちに寄り添おうと努力し、真剣に実習に取り組んでいたがゆえに難しさを感じたのだとも考えられる。つまり、実習で「大変」「困った」というネガティブな感想も、学生の成長にとって重要なきっかけであるとも考えられるのではないだろうか。真摯に実習に取り組んだ学生が抱えた課題に対して、実習後、どのようにフォローしていくのかということも、学生を指導する教員側の課題と考えられる。

表 11 実習で大変だったこと、困ったこと(おもな回答)

〈利用児・者とのかかわり、コミュニケーション〉(8件)

- ・最初のコミュニケーションの取り方
- ・意思疎通が難しい方、重度の利用者とのコミュニケーションの取り方(2)
- ・コミュニケーションのとり方が難しいことの接し方がみつけられず、あまり関わることができなかった。
- ・男性の(利用者の)方からのボディタッチが多かったこと。
- ・寮から出たときに利用者がこだわり行動を起こし、私の手を離さなかった
- ・重度の利用者との活動の際、気分や1人ひとりの波があるのでそれに合わせて行うことが難しくタイミングがなかなかつかめなかった。
- ・歯みがきの援助が難しく、口を開けられないなど、なかなか磨くのが困難なときもあった。

〈実習現場での学びについて〉(5件)

- ・発達年齢や、障害の特性を活かした教材選び、部分保育の内容を考えること。(2)
- ・さまざまな障害をもつ利用児・者の特性等の把握
- ・利用児のできることや集中力に合わせて臨機応変に対応すること
- ・利用児とのかかわり以外での作業

〈施設、職員とのコミュニケーション等について〉(5件)

- 職員とのかかわり
- ・学生を受け入れる雰囲気ではないことに困惑した
- ・施設の雰囲気や対応がよくなかった
- ・実習の前半は職員が人数、出勤状態がわからず(1,2人しかいなかった)、何ごとも頼れなかった。
- ・渡されたものと実際のスケジュールが異なることが多かった。

〈その他〉(5件)

- ・入浴は利用児と一緒のため、大変だった
- ・服に利用者さんの唾液がほぼ毎日ついた。
- ・(施設等の) 臭いや清潔感に欠けていたこと。
- ・慣れない土地での生活
- ・実習は楽しかったが、実習生同士の人間関係に悩んだ

③実習全体についてよかったと思うこと

表12のとおり、「実習で経験してよかったこと」に学生が記述した内容に加えて、「自分自身の成長と学び」「施設や施設保育職への認識」にかかわる記述がみられた。本学の学生の多くは、保育者といえば保育所保育士と幼稚園教諭をイメージして本校に入学してきたとみられる。入学後まもない時期に、ある学年に対して筆者が授業アンケートを通して「どのような職業を希望しているのか」と訊いたところ、未定者を除いたほぼ全員が保育所か幼稚園での勤務を希望していた。

本調査からは、施設実習を通して施設保育士の働き方や役割、専門性を認識して職場や職務に魅力を感じるという意識の変化がみられた実習生もみられた。このことについては後の「5 実習前後での気持ちの変化と就職について」で述べられているが、学生から施設実習を経験して施設や利用児・者に対する認識、就職に対する意識、さらには専門職としての保育士の専門性に対する意識の変化がみられた。それらが進路に対する視野を広げていったものと考えられる。

表 12 実習に行ってよかったと思うこと (おもな回答)

〈利用児・者とのかかわりと、かかわりを通じた学び〉(6件)

- ・ (さまざまな) 障害者の方とかかわることができてよかった(2)
- ・児童とのかかわり方を学ぶことができた

- 子どもたちと仲良くなれた。
- ・利用者さん、支援員さんに出会え、多くのことを学べた
- いろいろな人とかかわることができた

〈施設や障がいに対して学んだこと〉 (12件)

- ・利用児・者(障害児・者)とのかかわりを学べた(3)
- ・講義では学べない実践、子どもたちとの接触で現実の厳しさや障害への理解
- ・障害をもった方への対応の理解
- ・2歳以下の子どものようすがよくわかった
- ・予測できなかったようなことが起こり、子どもたちからの視線をあらためて考えることができ、さま ざまな子どもへの対応を学ぶことができた
- ・視覚支援などの子どもたち一人ひとりに合わせた支援のしかたを学ぶことができた。
- ・授業ではあまりイメージがわかなかったけど、体験してわかることもあった
- ・相手に対しての伝え方や言葉以外のコミュニケーション方法が身についた
- ・経験したことがないことをさせてもらったり、備品などをみることができた
- ・職員の方がみな優しく、特性やかかわり方など多くのことを学ぶことができた。

〈自分自身の成長と学び〉 (2件)

- ・一人の人間として自分を見つめなおすきっかけになった
- ・貴重な体験をし、自分のよいところや不足している部分をみつけることができた
- 心が強くなった

〈施設や施設保育職への認識〉 (5件)

- ・障害についてマイナスなイメージがなくなってよかった
- ・障害をもっている方への偏見や苦手意識がなくなった
- ・今まで知らなかったことをたくさん知ることができ、見方が変わった
- ・就職先を考える上での範囲が広がった
- ・施設の仕事内容の魅力を感じて、将来の選択肢が広がった

〈その他〉 (5件)

- ・利用者さんが、私と一緒にいることが楽しいと言ってくれたのがとてもうれしかった
- ・子どもに正しい鉛筆の持ち方を教えてあげられた
- ・最終日に利用者さんにプレゼントをもらった
- ・釧短の卒業生がいた
- 子どもへの愛が深まった

④実習全体について、大変だったことや困ったこと

詳細は表13のとおりだが、学生の回答は表11「実習で経験して大変だったこと、困ったこと」や、その他の項目で記載された内容とほぼ重複していた。学生自身の知識や経験不

足を自覚したうえでの回答もあるが、事前指導の際には学生に対して、指導保育士とのコミュニケーションの問題等を感じた場合は、まずは巡回の教員に相談するよう伝えておく必要があると考えられる。

表 13 実習に行って大変だったこと、困ったこと(おもな回答)

〈利用児・者とのかかわり、コミュニケーション〉(4件)

- 利用児・者とのかかわり
- ・男性利用者さんへの対応
- ・子どもたちが暴れたりなどしたときの被害(かむ、たたく、蹴る、つねる、ひっかく)が多かった。
- ・子どもたち同士のけんかが多くてどうしたらいいのかわからなかった。

〈実習現場での学びにかかわって〉(6件)

- ・汚物などの処理に衛生的な対処が感じられず個人的にきつかった。
- ・歯みがきの援助
- ・食事の援助。人によってできることや食べるスピードが違うため。
- 指導案の作成、設定保育
- ・降園後のお手伝いの中で、お花紙を切ってバラバラにする作業
- ・何をすればよいかわからず、職員に訊いても特にすることがなく時間を持て余すことが何度かあった

〈保育士による指導について〉(6件)

- ・日誌を書いても誰も見ていないようで戸惑った。質問などを書いても返事がなかった。
- ・日誌が 1 枚しか手元に帰ってこなかったので、指導欄に何が書かれているのかわからず、どこをどう 直せばよいのか困った。
- ・職員によって日誌の書き方や支援のしかたが違い、その場に応じて職員(の指導等)に合わせた。
- ・園長の話を聞くこと
- ・保育者とのかかわり

〈その他〉(6件)

- ・慣れない土地での生活
- ・泊まり込み中の実習生同士の人間関係
- ・施設の中の構造がわからなかった
- 朝が早かった
- ・移動の距離

2)利用児・者の情報について

①利用児・者情報を施設から教えていただくことができたか

実習中の学びを深める上で、利用者情報は貴重であることはいうまでもない。しかしプライバシーの問題ばかりではなく、知識が十分ではない学生に対して、どこまで利用児・者に

ついて伝えるべきなのかという判断は難しいことは十分に推察される。特にさまざまな事情を抱えた児童養護施設においては、難しい問題につながる可能性もあるだろう。

そうした事情もある中で、表 14 の通り「教えていただいた」「だいたい教えていただいた」と回答した学生が 88.5%を占めていた。特に障がい児・者入所施設では、学生の 100% が実習先で利用児・者の情報を教えていただくことができたと回答した。

表 14 利用児・者情報を教えていただくことができたか

人(%)

	教えて	だいたい教えて	あまり教えて	まったく教えて
	いただいた	いただいた	いただけなかった	いただけなかった
児童養護施設	1(25.0)	2(50.0)	0(0.0)	1(25.0)
発達支援センター	2(28.6)	2(28.6)	3(42.9)	0(0.0)
障がい児入所施設	1(33.3)	2(66.7)	0(0.0)	0(0.0)
障がい者入所施設	14(66.7)	7(33.3)	0(0.0)	0(0.0)
計	18(51.4)	13(37.1)	3(8.6)	1(2.9)

3)排泄・入浴介助について

①排泄介助について

実習生ばかりでなく職員も異性介助をしないことを厳格に定めている施設もある。

排泄介助を行った

学生は半数に満たない 36.4%だった(表15)。

発達支援センター で異性介助をした学 生の1名が行ったの は「見守り程度」だ った。

人(%)

	同性介助のみ	同性・異性介助を	排泄介助は
	行った	行った	しなかった
児童養護施設	0(0.0)	1(33.3)	2(66.7)
発達支援センター	0(0.0)	2(33.3)	4(66.7)
障がい児入所施設	2(66.7)	1(33.3)	0(0.0)
障がい者入所施設	4(19.0)	2(9.5)	15(71.4)
#	6(18.2)	6(18.2)	21(63.6)

②入浴介助について

入浴介助を行った学生は 29.4%だった。児童養護施設のうち「同性介助のみ行った」と回答した実習生は、入所児と一緒に入浴していた。この他の回答者は一緒に入浴していたのではなく介助のみ行っていたようだ。

	同性介助のみ	同性・異性介助を	入浴介助は	2. D/H
	行った	行った	しなかった	その他
児童養護施設	1(25.0)	1(25.0)	2(50.0)	0(0.0)
発達支援センター	0(0.0)	0(0.0)	6(100.0)	0(0.0)
障がい児入所施設	3(100.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
障がい者入所施設	5(23.8)	0(0.0)	15(71.4)	1(4.8)
計	9(26.5)	1(2.9)	23(67.6)	1(12.9)

③異性介助について

異性介助については、実習生は全員が「抵抗なかった」「子どもなので気にならなかった」と回答した(表 17)。障がい者入所施設で実習した1名がなぜか「子どもなので気にならなかった」と回答しているが、これは「気にならなかった」と回答したつもりであった可能性がある。「その他」に回答した学生は「初めは嫌だったが慣れた」と記述した。

乳幼児以外の排泄・入浴介助についても苦痛を訴える回答は表 17 ではみられないが、表 11 「大変だったこと、困ったこと」で、「入浴は利用児と一緒のため、大変だった」と回答 した学生はいた。

表 17 異性介助について(異性介助を行った学生のみ)

人(%)

	抵抗なかった	いやだった	子どもなので	その他
	払机なかつた	V1972572	気にならなかった	ての他
児童養護施設	1(50.0)	0(0.0)	1(50.0)	0(0.0)
発達支援センター	1(50.0)	0(0.0)	1(50.0)	0(0.0)
障がい児入所施設	1(50.0)	0(0.0)	1(50.0)	0(0.0)
障がい者入所施設	1(33.3)	0(0.0)	1(33.3)	1(33.3)
	4(44.4)	0(0.0)	4(44.4)	1(11.1)

(5)実習前後での気持ちの変化と就職について

本稿では、学生個々の多様な障がいへの理解度と知識の習得の差及び社会福祉を学ぶ姿勢や意欲の差、現在まで障がい児・者と関わった体験の有無等を含め、福祉施設実習後の学生の就職への思いや意識をアンケート結果から考察した。アンケートの回答から、①短大入学後、障がい児・者福祉の学習を意欲的に習得し、理解していたか ②身近に障がい児・者と関わった機会、生活体験があったか ③その他の率直な感想に対して考察した。

1)施設勤務の保育士になりたいと思ったか

表 18~21 から読みとれるように、実習前にはほとんどの学生が不安や苦手意識をもって 障がい児・者支援施設実習に臨んだようすが見受けられたが、半数はその苦手意識が好転し て終了している。

学生の半数が、施設実習での職員からの指導や利用児・者との関わりが印象に残ったと述べている。ときには納得できない指摘もあったようだが、学びを深めたことに感謝し、27.8%が「利用児・者との関わりが楽しかった」との感想を述べていた。また、実習を通して自分が成長したことを自覚できたと答えた学生が 93.8%と高かったが、残念ながら就職志望に結びつくには至っていない。このことについては後に述べる。

表18 実習前の施設の仕事への意識

人 (%)

	とても	どちらかというと	どちらでも	あまり	なりたくない
	なりたい	なりたい	ない	なりたくない	
児童養護施設	0(0.0)	1(25.0)	1(25.0)	0(0.0)	2(50.0)
発達支援センター	0(0.0)	2(28.6)	3(42.9)	1(14.3)	1(14.3)
障がい児入所施設	1(33.3)	0(0.0)	1(33.3)	0(0.0)	1(33.3)
障がい者入所施設	1(4.8)	2(9.5)	7(33.3)	7(33.3)	4(19.0)
計	2(5.7)	5(14.3)	12(34.3)	8(22.9)	8(22.9)

表19 実習後の施設の仕事への意識

人 (%)

	とても	どちらかというと	どちらでも	あまり	なりたくない
	なりたい	なりたい	ない	なりたくない	
児童養護施設	1(25.0)	1(25.0)	0(0.0)	1(25.0)	1(25.0)
発達支援センター	0(0.0)	2(28.6)	3(42.9)	0(0.0)	2(28.6)
障がい児入所施設	0(0.0)	0(0.0)	2(66.7)	0(0.0)	1(33.3)
障がい者入所施設	5(23.8)	6(28.6)	5(23.8)	4(19.0)	1(4.8)
計	6(17.1)	9(25.7)	10(28.6)	5(14.3)	5(14.3)

生の0	実習前と後の意識の変化
78 ZU	

人(%)

	向上	変化なし	低下
児童養護施設	3(75.0)	1(25.0)	0(0.0)
発達支援センター	2(28.6)	4(57.1)	1(14.3)
障がい児入所施設	0(0.0)	3(100.0)	0(0.0)
障がい者入所施設	13(61.9)	7(33.3)	1(4.8)
計	18(51.4)	15(42.9)	2(5.7)

表21 施設実習前後で意識が変容した理由

(複数回答あり) 人(%)
実習施設の雰囲気がよかった	13(36.1)
利用児・者とのかかわりが楽しかった	10(27.8)
自分の成長を感じ、自信がついた	16(44.4)
実習施設の雰囲気が好きではなかった	5(13.9)
実習施設の職員が魅力的ではなかった	5(13.9)
利用児・者とのかかわりがつらかった	4(11.1)
施設での仕事に自信をもてないと感じた	0(0)
施設での仕事に自信をもてないと感じた	2(5.6)
その他	3(8.3)

2)就職について

全体的には、就職活動に向かう意識は保育・教育部門に較べるとはるかに低く、平成30年度は学生48名のうち5名が就職につながった。この5名が選択した施設は、障害者入所施設2、介護施設1、乳児院1、児童養護施設1で、入学後に就職先として選択した学生は4名、入学前から就職先として施設に関心をもっていた学生は1名だった。

実習が就職につながらなかった理由として、以下の5点が考えられる。すなわち、①日常生活の中で、障がいを抱えた成人(児童)との関わり体験が希薄だった ②幼児期の障がいが広範囲である実態を知り、障がいに応じた療育指導に難しさを感じた ③日常生活での介護体験がない学生には、成人の生活介助への戸惑いと苦手意識が残った ④児童養護施設で幼児から思春期に至る幅広い年齢の入所児と接し、複雑な家庭背景、入所児の複雑な心理と適切な養育援助に難しさを感じた ⑤職員の児童対応に理解できない部分について、実習中に疑問を解消するための職員との交流や指導を受ける時間がなかった である。⑤には、職員不足という背景があるものと考えられる。

表22 もしも福祉施設に就職するなら実習先に就職したいと思うか

人(%)

	ぜひ	どちらかというと	どちらでも	あまり	就職
	就職したい	したい	ない	就職したくない	したくない
児童養護施設	1(25.0)	1(25.0)	1(25.0)	0(0)	1(25.0)
発達支援センター	1(14.3)	1(14.3)	0(0)	1(14.3)	4(57.1)
障がい児入所施設	0(0)	0(0)	1(33.3)	0(0)	2(66.7)
障がい者入所施設	9(42.9)	8(38.1)	2(9.5)	1(4.8)	1(4.8)
計	11(31.4)	10(28.6)	4(11.4)	2(5.7)	8(22.9)

	ぜひ	どちらかというと	どちらでもない	あまり	勧めたくない
	勧めたい	勧めたい		勧めたくない	
児童養護施設	1(25.0)	1(25.0)	2(50.0)	0(0)	0(0)
発達支援センター	0(0)	2(28.6)	1(14.3)	2(28.6)	2(28.6)
障がい児入所施設	0(0)	0(0)	1(33.3)	1(33.3)	1(33.3)
障がい者入所施設	12(57.1)	3(14.3)	5(23.8)	0(0)	1(4.8%)
計	13(37.1)	6(17.1)	9(25.7)	3(8.6)	4(11.4)

(6)その他、実習に関して教員や実習施設に伝えたいこと

表 24 の通り「後輩にも伝えたいこと」には、実習に際しての基本的な心構えや、実習は大変ではあっても得るものがあると伝える記述がみられた。「実習先について学校へ伝えたいこと」としておもにみられたのは、自分たちが実習を行った施設を実習先とすることについて感じたことを伝えようとする意見だった。

実習施設は、公共の交通機関で通うには利便性のよくない立地にある施設が多い。施設の特色はそれぞれ大きく異なる上に、実習に際して施設から求められる実習条件が変更になる場合もある。たとえば今年度に関しては、年度が変わったタイミングで予防接種や健康診断の内容が変更になった施設があったが、施設からの連絡は4月時点であったにもかかわらず、実習担当者がそのことを把握した時期が遅かったため学生への確認が遅れ、学生は4月に受け取った施設からの指示を確認していなかったため、直前になって準備不足に気づいて慌てる事態となった。実習先の立地や条件等をよく確認せずに希望した学生による、実習施設とのミスマッチは例年みられるようだ。

今後も学生それぞれの実習先選定に際しては十分検討し、実習前の準備についてはよく 確認するよう学生に指導する必要があることがあらためて認識された。

〈後輩にも伝えたいこと〉 (7件)

- ・子どもたちの特性を早く吸収することでよりやりがいが出てくる。
- ・短い時間で指導案と部分実習の準備を進めなければならないのは大変だったが、これもよい勉強だった。
- ・他の園にいる「気になる子」への援助のしかたの参考になる。
- ・何でも教えてくれたり、困ったことがあれば助けてくれたりととても優しい方が多 く、実習が楽しかった。
- ・実習先として勧める
- ・場所の確認や、施設のことを事前に知っておくとよいと思う。
- ・住み込みはすべて自分で2週間近く過ごすため、精神的・体力的に覚悟が必要だと思う。
- ・レクリエーションの計画や指導案は何もないことと、日誌はペン書きだが修正ペンが使えるということを伝えたい

〈実習先について学校へ伝えたいこと〉 (5件)

- ・実習生に対して厳しい部分が多い。本気で学びたい学生にとってはとても多くの学びを得ることができるが、中途半端な気持ちであればとてもつらい実習になると思う。
- ・園長先生からのお話の中に、実習生を受け入れたくないととらえられる言葉があったのが気になった。
- ・作業が本当につらい。

〈その他、学校への要望等〉

- ・実習に行くにあたって検査などを行い、お金が他の学生よりも多くかかり、自分のために行く実習で はあるがその点について説明不足だったと思う。こちらの確認不足もあるが、来年の2年生にはだい たいかかる金額を伝えていただきたいと思う。
- ・指導案の用紙は統一にするか、実習前に事前に説明していただけると嬉しい。
- ちょうどよい時間のバスがなく、タクシーで通った。

(7)実習先の宿舎施設

住み込みで実習した学生にのみ、宿舎施設について質問した。

宿舎施設について「よかったところ」としては、宿舎施設の充実、実習時間外も施設職員の指導や心遣いを受けられたこと、宿舎に近いため実習に集中できたこと等が挙げられた(表 25)。

「よくなかったところ」としては、プライベートな時間がとれず実習時間の終了後も気持ちが切り替えられないことや、実習生同士の人間関係、それらの緊張感による疲れから体調を崩しやすいことが挙げられた(表 26)。また、利用児が居住する寮では、夜は実習生と利用児たちのみで過ごすことになり、不安を感じたという記述があった。

表 25 宿舎施設でよかったところ (おもな回答)

B児童養護施設

・一軒家だったのでのんびりできた

C児童養護施設

- ・朝が早いので、起きてすぐに勤務を始められる
- ・実習後にすぐ寝ることができる。
- ・朝、子どもたちを起こしたり、夜勤で子どもたちとたくさん関われた。
- ・休日は子どもたちと1日中遊ぶことができた
- ・休憩中に仮眠をとれる

A障がい児入所施設

- 友だちと楽しく過ごせた
- ・一緒に実習の反省ができた
- ・実習後にすぐ宿舎に帰ることができる
- ・昼休憩の時間に宿舎に帰ることができる

B障がい児入所施設

- ・余暇の時間は職員とも多く話せる
- ・給食は量が多くバランスが良い

A障がい者入所施設

- ・部屋がきれいで、電化製品がそろっていた
- ・電子レンジや電子ケトルなどがありとても便利だった。
- ・洗濯物を干す物もあり、洗濯もできた
- ・部屋が広く、職員の方がたくさん食べ物をくれた
- ・気持ちが継続したまま日誌に取り組める
- ・わからないことを、夜中等以外は、職員の方にすぐにいつでも聞くことができる

表 26 宿舎施設でよくなかったところ (おもな回答)

A 施設 (児童養護施設)

・虫、クモなどがいた

B 施設 (児童養護施設)

- 朝が早い(2)
- 精神的にきつい

C施設(障がい児入所施設)

- ・清潔感がない、匂いがある
- ・職員が少なく、子どもがいるのに寮内でも1人になってしまうことがあった

D 施設 (障がい児入所施設)

- ・自分の時間がない
- 自炊をしなければならない
- ・実習生3人に対して布団が2つしかなかった。
- ・(実習生に貸出していた) 自転車の前輪、後輪がパンクしていた。

E施設 (障がい者入所施設)

- ・ふとんが少なくて、少し寒かった
- ・電波が届かないため、連絡がとれない(2)
- ・トイレが遠く、夜間は暗くて怖かった
- ・自分に関しては実習生同士のほうが少しつらいところがあり、暇なときや何をしてよいかわからな い時間は正直つらかった
- ・緊張感が1日中続くため、帰宅後に体調を崩す可能性がある

4.これまでの成果と今後の課題

(1)実習の振り返りとして

2週間と少ない実習期間の中で、障がい者(児)福祉の実態について表面的だが理解の広がりが窺えた。あわせて、支援員・指導員の仕事内容の責任の重さや個々に応じた適時適切な支援が求められる難しさも実感したと考えられる。今回のアンケート結果から見えるように、就職先として選択しなかったという現実はあるが、短大入学後の1年半で、障害者(児)施設実習を体験し、学生たちが障害者(児)理解の入り口に辿り着いたことは明らかである。現在、多くの学生が幼児教育・保育関係の就職を選択し内定を得ているが、今後、様々な社会人生活や就労体験を経て、改めて障害者(児)福祉へと職種を変更する可能性もある。そのような卒業生が過去にも見られた。その時は、実習直後の不安を克服した時であり、また障害者(児)支援への新たな意欲が膨らんだ時と頼もしく感じる時でもある。

(2)実習巡回をおこなって ~ 施設職員からみた実習生の存在

以上のアンケートは、実習を行った学生の視点であるので、巡回で得た施設職員、施設長からの声も記しておきたい。

1)指導者の視点(巡回時の指導員との面談から)

- ・実習生に援助技術や生活介助を指導する事で、日頃の支援員としての自分を振り返り、利用者と職員の関係性を見直す良い機会になっている。
- ・実習生の感想や気づき、質問に応えるなかで、利用者視点にたって(原点に戻って)自分の仕事内容や職場環境を見直す機会となっている。
- ・学生の実習姿勢をみたり、質問に答えたりする中で、障害者理解や社会福祉について改め て再考し、福祉への勉強の必要性を認める機会となっている。

2)施設長からの視点(巡回時に施設長との面談から)

- ・障害者(児)施設が、地域に開かれた施設であり、利用者は地域の一員であってほしい。
- ・地域の人々には、障害者(児)理解の広がりを期待している。その為にも、実習生やボランティアを積極的に受け入れ、利用者、福祉施設への理解と学びをひろげたい。
- ・現実には、支援員不足が悩みである。有資格者を求めているが時には無資格者を雇い、そ こから職員教育をしている実態もある。短大生の就職を期待している。
- ・障がい者(児)支援のためには、職員の援助技術、障がい理解、療育の質の向上が欠かせない。常に向上心をもって勉強していくことを職員に伝え、研修の機会を設けている。
- ・障害者(児)が地域社会と繋がり、安心できる居場所となる施設づくりに努力している。 今回は補助的なものにとどまるが、これらが施設に広く浸透しているとすれば、依頼する 本学や養成校との協働で諸問題の解決の方向は見えてくるのではないだろうか。

(3)先行研究との関係で

本報告では、施設実習を行った学生の"学び"(よかったこと)と"困り感"(大変だったこと、困ったこと)を中心に整理をしたが、先行研究の指標を参考に再整理してみたい。松藤光生・浦恭子(2018)では、「実習における学びの内容を測る尺度」として、「実習学習尺度」を用いており、この尺度は①「利用児者との関わり・直接的援助」、②「保育士からの指導」、③「実習施設の理解」の「3因子構造」からなると述べているxi。本報告では、①関連で、(表 10)(表 12)のうち〈利用児・者とのかかわりと、かかわりを通じた学び〉、(表 11)(表 13)のうち〈利用児・者とのかかわり、コミュニケーション〉などが対応し、②関連で、(表 8)(表 9)(表 13)などが対応。③関連では、(表 10)(表 12)の〈施設や障がいに対して学んだこと〉などが対応する。

実習を通して、実習先の施設や利用児・者に対するイメージが好転するという平尾・土谷 (2016)の研究xiiの通り、本学でもその傾向が見られた(「実習前と後の意識の変化(表 20)」、「施設実習前後で意識が変容した理由(表 21)」)。これは利用者の生活や職員の働きを間近で見て、実際にかかわりながら学んだ施設実習のもつ大きな意義だと考えたい。ただし、本学でも注iiiで触れたように、1年次の2度の施設就職希望学生が希望通りに施設へ就職したということには必ずしもなっていなかったし、イメージが悪化した場合もあった(「実習前の施設の仕事への意識(表 18)」、「実習後の施設の仕事への意識(表 19)」、(表 20)(表 21))。学生自身は、授業や研修、実習、さらには家庭環境、経済的要因、人脈等で思いが絶えず揺り動かされ、就職希望が変化する場合も珍しくない。それでも施設実習での学びは活かされるはずである。今後は、どのような要素が学生にとって良い学びになり、学生に強い影響を与えるのかなどを他の事例も参考にしながら研究を進めたい。

大崎・長谷中・高瀬(2017)では、「接触経験は知的障害児(者)に対する態度に肯定的な影響を及ぼすとは限らず、否定的態度が形成・強化される場合や変化しない場合もあり、接触経験だけでなく、『接触経験の質』が重要」だと指摘しているxiii。また、松藤・中村(2016)では、実習施設種によって学びの差があることを指摘しxiv、松藤・浦(2018)では、施設実

習における学びや体験では、希望通りの実習先かどうかは大きく影響せず、「実習の中で希望通りの実習体験が得られたか、予想外の学びが得られたかが影響を与えることが示唆された」としているxv。いずれも、大きな方向性を示しており、今後の道標としたい。

< むすびに >

学生にとって福祉施設実習の2週間は、保育士資格取得の為の絶対必要条件である。学生の殆どが、幼児期の教育・保育を目指して入学するため、障害者(児)福祉への関心や理解は十分とは言えないスタートが多い。また、実際に障害者(児)との関わりを持った体験がない学生も多い。不安感が先に立ち、出来るならば実習を辞退したいと相談に来る学生も時にはいる。

しかし、わずか2週間の実習体験を通して得た気づきや学びが、今回のアンケート結果 から見ることが出来、更には、自分の成長につながったと自覚した学生が半数を超えている 実態は頼もしい。幼児教育からスタートし、乳幼児期の子どもの個々の個性・特徴・人権を 保障しようと学んでいる学生達にとって、様々な障がいを抱えた方々への理解と人権擁護 の思いは共通したものだと気付いたことだろう。

卒業時には就職に結びつかなくとも、今後の社会を担っていく一員としての貴重な経験を 得たことは確信できる。実習生指導では、多くの施設の皆様のご指導に感謝すると共に、障 害者(児)の方々のより充実した生活の保障と、権利擁護について今後も見守り、応援をし ていきたい。

i 本学では、厚生労働省が示す「保育実習 I」(必修 4 単位)を分割し、「保育実習 I」(保育所における実習 2 単位)と「保育実習Ⅲ」(保育所以外の施設における実習 2 単位)に分けており、本校の対象はそのうちの「保育実習Ⅲ」である。

単位)に分けており、本校の対象はそのうちの「保育実習Ⅲ」である。 井上薫・岩野布美子・進藤信子・吉川修・塚本久仁佳・生駒英法・長津詩織「<授業 実践>学生は幼稚園実習で何を学ぶのか―本学科における実習後のアンケート結果から 一|『釧路短期大学幼児教育学科実践報告』、釧路短期大学幼児教育学科、2018年2月、 http://www.midorigaoka.ac.jp/kushirojc/php/disclosure/others/contribution/report01.pdf 多田内幸子・重永茂(2014)では、就職先について、「入学時から施設への希望を持 っていた学生」が2013年度調査で実習前3%、実習後5%だったとのこと(「施設実習の 前後での本学幼児教育学科学生の意識調査」『久留米信愛女学院短期大学研究紀要』37、 2014年、p.75)。なお、本学の2018年度実習生の場合、入学すぐに行った就職希望調査 (第2希望まで;4/7)では、50名中、施設関係へは第1希望で7名(児童養護施設3、 障碍者支援施設 1、児童館 3)、第 2 希望で 10 名(児童養護施設 2、乳児院 1、障碍者支援 施設 5、児童館 1;介護施設 1)であったが、6月の施設研修旅行(児童養護施設、障碍児 入所施設、障碍者支援施設を見学、障碍児・者施設では交流あり)や2年生の実習報告会 (10月)の後に行った再度の就職希望調査(11/28)では、50名中、施設関係へは第1希 望で7名(児童養護施設または乳児院1、乳児院1、障碍者支援施設2、児童館2;福祉施 設 1)、第 2 希望で 11 名(児童養護施設 4、児童養護施設または乳児院 1、乳児院 1、障碍 者支援施設 4、児童館 1) であった。なお、この 2 回それぞれで第 1・第 2 希望とも施設 関係としたのは各3名だが、2回とも施設関係を第1・2希望に上げた学生はいなかった。 2001/平成13年6月29日に、雇児発第438、439号で発された厚生労働省雇用均 等・児童家庭局長通知、「指定保育士養成施設の指定基準について」および「指定保育士 養成施設における保育実習の実施基準について」が統合され、2003/平成 15 年 12 月 9 日、雇児発第 1209001 号、厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知「指定保育士養成施設

の指定及び運営の基準について」となったが、2018/平成30年4月末までに8回改正され、現行のものは2018/平成30年4月27日改正のもの。

- v 乳児院、母子生活支援施設、障害児入所施設、児童発達支援センター、障害者支援施設、指定障害福祉サービス事業所(生活介護、自立訓練、就労移行支援又は就労継続支援を行うものに限る)、児童養護施設、情緒障害児短期治療施設、児童自立支援施設、児童相談所一時保護施設又は独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園(2018/平成30年4月27日一部改正時点)
- vi 「1. 実習費 1 単位 5,000 円(平成 18 年 2 月の総会で承認) 2. 実習依頼日 公文書発送日は、3 月 1 日とする。(平成 18 年 2 月の総会で承認)」とある(「実習(福祉施設)に関する確認事項等について」『平成 21 年度全国保育士養成協議会北海道ブロック協議会総会』資料、2010/平成 22 年 2 月 19 日)。なお、1.について、それ以前は 3,500 円として統一されていた。
- vii 研究委員会、後藤昌彦委員長による進捗状況報告(平成 18 年度全国保育士養成協議会北海道ブロック協議会、北海道ブロック協議会総会、2007/平成 19 年 2 月 23 日)。
- viii 『福祉施設実習ガイドライン』奥付。執筆者は、後藤昌彦(藤女子大学)、西塔正一(釧路短期大学)、三上正明(旭川大学女子短期大学部)、重野淳子(光塩学園女子短期大学)以上4名は同協議会理事かつ研究委員。そのほか、安井睦(光塩学園女子短期大学)、丸尾正志(多機能型グループホームかおり)、和田敏幸(ひかり学園)、遠藤光博(ノビロ学園)の各氏。※所属は当時のもの。
- ix 第3版(2017年4月1日発行)の編集は、松田賢一(函館短期大学・委員長)、小川 恭子(藤女子大学)、勝井陽子(北翔大学短期大学部)の各氏によって行われた。
- x 第 1 章 施設実習の目的と意義、『保育実習ガイドライン(第 3 版)(施設実習編)』、p.1
- xi 松藤光生・浦恭子「施設実習における学びと体験に影響を与える要因」『中村学園大学 発達支援センター研究紀要』9、2018 年 2 月、p.78
- xii 平尾太亮・土谷由美子(2016)(「保育士養成課程における施設実習に関する一研究」『中国学園紀要』15、2016年6月)や多田内幸子・重永茂(2014)(注iii参照)、知的障碍児(者)観に特化したものとして大崎千秋・長谷中崇志・高瀬愼二(2017)(「保育科学生の知的障碍児(者)観に関する基礎的研究—A短期大学の施設実習アンケート調査分析から—」『名古屋柳城短期大学研究紀要』39、2017年12月)などがある。
- xiii 前掲、大崎・長谷中・高瀬 (2017)、p.137
- xiv 松藤光生・中村恭子「施設実習における実習施設種による学びの差異」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』48、2016年3月。乳児院、児童養護施設、母子生活支援施設、障害児支援施設に類別し、「利用児者との関わり・直接的援助」では母子生活支援施設以外の3施設群で「より体験し学んでいる」こと(p.69)。対照的に母子生活支援施設では他の施設群に比し、「保護者支援についての理解」を深めることができること(p.70)。「障害児の理解」では障害児支援施設はもちろんだが、「児童養護施設での実習がより障害児への理解を促す」(p.70)ことなどが指摘されている。
- xv 前掲、松藤光生・浦恭子 (2018)、p.83

小学校におけるプログラミング教育の展開について

―カリキュラム・マネジメントの視点から—

竹ヶ原 康弘

1. はじめに ―本稿の課題―

本稿は、平成29年3月に告示(平成32年度完全実施)された新小学校学習指導要領において設定された「プログラミング教育」の実践、及び、学校現場においてプログラミング教育を展開する上で留意すべき諸要素について検討するものである。

小学校におけるプログラミング教育については、新学習指導要領の第1章「総則」の第3の1の3のイにおいて「児童がプログラミングを体験しながら、コンピューターに意図した処理を行わせるために必要な論理的思考力を身に付けるための学習活動」と規定されている。

しかし、プログラミング教育の小学校現場への導入には困難が予想される。このことについては様々な指摘がみられるが、大きくは「恐らく、大多数の小学校教員がプログラミング教育の指導に不安を持つ」ことに集約されよう。山口好和・橋本忠和「豊富な情報環境下での「プログラミング教育」への期待と不安一教師・保護者への簡易調査と「ガイド書籍」の比較作業から一」」によれば、教員免許更新講習に参加した教員を対象としたアンケートでは、小学校にプログラミング教育を導入することに不安があるかとの設問に「どちらともいえない」という回答を得ている。「アンプラグド(パソコンを使用しない状態)でのプログラミング教育」といった主張も一部で見受けられるが、プログラミングという語には「コンピューターに目的の仕事をさせるための処理手順を、プログラミング言語で作成したもの」2)という以上の意味は存在しない。正しい意味で「プログラミング教育」を行うには、コンピューターが不可欠であり、コンピューターに命令をするために何らかのプログラミング言語を使用する必要があろう。「コンピューターを使用しないプログラミング教育」は、「プログラミング的思考」を学ぶことはできるが、「プログラミング教育」としてはイレギュラーな形態であると認識すべきである。

新学習指導要領においてプログラミング教育が導入されることが明らかになった後、書店の棚には低学年向けのプログラミング教本が多数並んだ。プログラミングの概念を教える本や、特定のアプリケーションを使用してのいわゆる「プログラミング的思考」の訓練を意図したものにはじまり、表紙だけを現代風なイラストに書き換えて内容は従来のままのプログラミング教本なものなど、その内容は多様である。

文部科学省はプログラミング教育を推進するために『小学校プログラミング教育の手引き』(以下、煩を避け『手引』とする)を作成・公開している³⁾。平成 31 年 3 月現在では第 2 版が公開されているが、この手引の作成理由は「教師の皆さんがプログラミング教育に対して抱いている不安を解消し、安心して取り組んでいただけるようにすることが本手引のねらいです」⁴⁾となっている。『手引』は不安の理由を「プログラミングは難しそう

だ」という印象がもたれがち」5⁹ だとするが、それ以外にも「仮に授業で展開するとして、 どの言語を体験・習得させるのか」「プラットフォームは」といった点も検討する必要が あることを考えれば、不安を覚える原因は多岐にわたる。

新学習指導要領に規定された以上、何らかの形でプログラミング教育に取り組む必要がある。では、小学校の現場ではどのようにプログラミング教育について取り組むべきであろうか。

以下、章を変え、今後、小学校においてプログラミング教育を実施する際の課題になる と思われる事柄について概観してみたい。

2. 学生を対象としたアンケートにみる情報教育の課題

新学習指導要領において、小学校におけるプログラミング教育は、算数・理科・総合的な学習の時間において例示があるが、その他の場面での実施は学校の裁量に任されている。プログラミング教育は平成 20 年公示の旧学習指導要領にはみられない新たな指導内容であり、今後の研究と実践の蓄積が求められ、平成 32 年度の完全実施に向けて研究論文や実践報告が発表されている6 。

現在の筆者の勤務校は小学校教員の育成を主目的としているが、以下では本学の学生に対して実施したプログラミング教育についてのアンケート結果を元に、プログラミング教育を展開する上での課題について考えてみたい。本アンケート実施期間は2018年の12月20日から2019年の1月10日まで、筆者の講義を受講している学生46名を対象とした。なお、回答した学生の学年と教員を志望するか否かの割合は以下のグラフ1・2、表1・2の通りである。合計5間で、以下、1間ずつ分析してゆきたい。

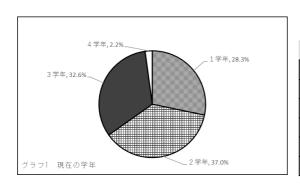


表1 現在の学年		
1学年	13	28.3%
2学年	17	37.0%
3学年	15	32.6%
4学年	1	2.2%
過年度	0	0.0%
計	46	100.0%

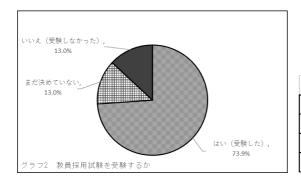


表2 教員採用試験を受験する	カゝ	
はい (受験した)	34	73.9%
まだ決めていない	6	13.0%
いいえ(受験しなかった)	6	13.0%
計	46	100.0%

(1)プログラミング教育の導入について、どのような印象を持っていますか?

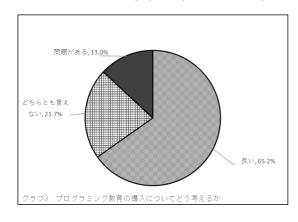


表3 プログラミング教育の導入についてどう考える						
回答	回答数	回答比率				
良い	30	65.2%				
どちらとも言えない	10	21.7%				
問題がある	6	13.0%				
計	46	100.0%				

1 問目では、小学校におけるプログラミング教育の導入についての印象を答えてもらった。30人・65.2 パーセントが「良いと思う」と回答している。「どちらともいえない」を入れてもプログラミング教育の導入に否定的な学生は半数以下である。前出の山口・橋本論文における「小学校にプログラミング教育を導入することに不安があるか」との設問に対して「どちらともいえない」の回答が最多数であったことと比較すると⁷⁾、現時点では学生の方がプログラミング教育に対して積極的であるといえよう。

(2)1 問目で「問題があると思う」と答えた方は、簡単で構いませんので理由を教えてください。

この設問は1問目で「問題があると思う」と回答した学生のみを対象とした記述回答項目である。誤タイプと判断される語や文には「ママ」を付した(以下同)。また、論述の便宜上、回答には $a\sim f$ の記号を振った。

- a. プログラミングよりも優先して行うべき教育が多々あると考えるため。
- b. 本当に必要があるのか。
- c. 小学生にはまだ早い。(教育的には関係が薄いが、メディアや非教育者の中で プログラミング教育の受け止められ方が違っていると感じられる。(ex) C 言 語を用いた情報操作を小学生で習う等)
- d. プログラミングという専門的なことは、大学や、専門学校で行えばよいと思う。また、向き不向きがあるので、やりたい人だけ自主的に勉強していく方がよいと思う。
- e. 教師の資質不足。
- f. 多様な考えを潰してしまうごではないのか。

1問目で「問題があると思う」と回答した 6 名の学生による回答である。a と b は、小学生にプログラミング教育は早すぎるのではないかという意見である。また、c と d は小

学校でプログラミング教育を行うことへの疑問、e は児童ではなく教員側に課題があるのではないかという意見である。

(3)プログラミング教育を展開することに関して心配や不安がありますか。

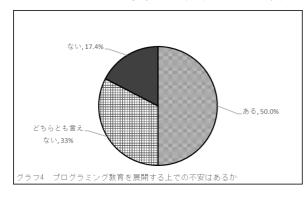


表4 プログラミング教育を展開す	る上での不安	だはあるか
回答	回答数	回答比率
ある	23	50.0%
どちらとも言えない	15	32.6%
ない	8	17.4%
計	46	100.0%

アンケートの 1 問目ではプログラミング教育導入の是非について学生に質問したが、3 問目は「自分が教えるとしたら」を答えさせる問いを設けた。ここ数年、筆者は勤務校において 1 学年向けの講義である「情報機器の操作」を担当し、主に国語科・社会科の研究室に所属する学生を対象として文章作成アプリケーション・表計算アプリケーションの操作について指導してきた。また、ここ昨年度・本年度は新学習指導要領に対応させるため、JavaScript(2017年度)・BASIC(2018年度)でのプログラミングを体験させている。ただ、管見の限り、これらのアプリケーションの操作に関する学生の能力差は大きい。特に表計算アプリケーションの操作の実力差が大きく、表計算アプリケーションに対しての苦手意識は強い。2017年度・2018年度の「情報機器の操作」の講義開始前の事前アンケートは以下のような結果であった。

2017年度(受講者36人)

「表計算アプリケーションで表をつくったり数式で計算をしたりはできますか」

できる:13.9% (5人)

ある程度はできる:30.6%(11人)

できない:55.6%(20人)

2018年度(受講者37人)

「表計算アプリケーションで表をつくったり数式で計算をしたりはできますか」

できる:2.7% (1人)

ある程度はできる: 32.4% (12人)

できない:64.9% (24人)

反名	数科別得点						総合得点		
2-9	国語	数学	英語	社会	理科	総得点	平均点	順位	赤点
	29	91	57	41	85	=SUM(\$C6:\$G6	=AVERAGE(\$C	=RANK(\$H6,\$H	=COUNTIF(\$0
	73	67	77	93	79	=SUM(\$C7:\$G	=AVERAGE(\$C	=RANK(\$H7,\$H	=COUNTIF(\$0
	75	81	95	67	77	=SUM(\$C8:\$G8	=AVERAGE(\$C	=RANK(\$H8,\$H	=COUNTIF(\$0
	95	21	65	71	27	=SUM(\$C9:\$G9	=AVERAGE(\$C	=RANK(\$H9,\$H	=COUNTIF(\$0
	78	71	35	78	74	=SUM(\$C10:\$0	=AVERAGE(\$C	=RANK(\$H10,\$	=COUNTIF(\$0
	63	90	81	89	91	=SUM(\$C11:\$0	=AVERAGE(\$C	=RANK(\$H11,\$	=COUNTIF(\$0
	90	85	88	91	96	=SUM(\$C12:\$0	=AVERAGE(\$C	=RANK(\$H12,\$	=COUNTIF(\$0
	72	77	79	61	70			=RANK(\$H13,\$	
	85	53	54	71	84			=RANK(\$H14,\$	
	81	82	64	73	75		=AVERAGE(\$C	=RANK(\$H15,\$	=COUNTIF(\$0
含 計		=SUM(D\$6:D\$					_	_	_
平 均	=AVERAGE(C\$	=AVERAGE(D\$	=AVERAGE(E\$	=AVERAGE(F\$	=AVERAGE(G\$	_	=AVERAGE(\$16	-	_
		1 年 1	組前期評定一覧						
兵名	国語	数学	英語	社会	理科	平均点	順位		
蒸 名	=IF(\$C6>=80,	数学 =IF(\$D6>=80,5	=IF(\$E6>=80,5	=IF(\$F6>=80,5	=IF(\$G6>=80,5	=AVERAGE(\$C	=RANK(\$H22,\$		
充实	=IF(\$C6>=80, =IF(\$C7>=80,5	数学 =IF(\$D6>=80,5 =IF(\$D7>=80,5	=IF(\$E6>=80,5 =IF(\$E7>=80,5	=IF(\$F6>=80,5 =IF(\$F7>=80,5	=IF(\$G6>=80,6 =IF(\$G7>=80,6	=AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C	=RANK(\$H22,\$ =RANK(\$H23,\$		
54	=IF(\$C6>=80, =IF(\$C7>=80,5 =IF(\$C8>=80,5	数学 =IF(\$D6>=80,5 5=IF(\$D7>=80,5 6=IF(\$D8>=80,5	=IF(\$E6>=80,5 =IF(\$E7>=80,5 =IF(\$E8>=80,5	=IF(\$F6>=80,5 =IF(\$F7>=80,5 =IF(\$F8>=80,5	=IF(\$G6>=80,8 =IF(\$G7>=80,8 =IF(\$G8>=80,8	=AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C	=RANK(\$H22,\$ =RANK(\$H23,\$ =RANK(\$H24,\$		
£4	=IF(\$C6>=80, =IF(\$C7>=80,5 =IF(\$C8>=80,5 =IF(\$C9>=80,5	数字 =IF(\$D6>=80.5 =IF(\$D7>=80.5 =IF(\$D8>=80.5 =IF(\$D9>=80.5	=IF(\$E6>=80.5 =IF(\$E7>=80.5 =IF(\$E8>=80.5 =IF(\$E9>=80.5	=IF(\$F6>=80,5 =IF(\$F7>=80,5 =IF(\$F8>=80,5 =IF(\$F9>=80,5	=IF(\$G6>=80,0 =IF(\$G7>=80,0 =IF(\$G8>=80,0 =IF(\$G9>=80,0	=AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C	=RANK(\$H22,\$ =RANK(\$H23,\$ =RANK(\$H24,\$ =RANK(\$H25,\$		
5.5	=IF(\$C6>=80, =IF(\$C7>=80,6 =IF(\$C8>=80,6 =IF(\$C9>=80,6 =IF(\$C10>=80	数字 =IF(\$D6>=80.5 =IF(\$D7>=80.5 =IF(\$D8>=80.5 =IF(\$D9>=80.5 =IF(\$D10>=80.5	= F(\$E6>=80.5 = F(\$E7>=80.5 = F(\$E8>=80.5 = F(\$E9>=80.5 = F(\$E10>=80	= F(\$F6>=80.5 = F(\$F7>=80.5 = F(\$F8>=80.5 = F(\$F9>=80.5 = F(\$F10>=80.5	= F(\$G6>=80,0 = F(\$G7>=80,0 = F(\$G8>=80,0 = F(\$G9>=80,0 = F(\$G10>=80,0	=AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C	=RANK(\$H22,\$ =RANK(\$H23,\$ =RANK(\$H24,\$ =RANK(\$H25,\$ =RANK(\$H25,\$		
ř\$	=IF(\$C6>=80. =IF(\$C7>=80.6 =IF(\$C8>=80.6 =IF(\$C9>=80.6 =IF(\$C10>=80 =IF(\$C11>=80	数字 =IF(\$D6>=80.5 =IF(\$D7>=80.5 =IF(\$D8>=80.5 =IF(\$D9>=80.5 =IF(\$D10>=80.5 =IF(\$D10>=80.5	= F(\$E6>=80.5 = F(\$E7>=80.5 = F(\$E8>=80.5 = F(\$E9>=80.5 = F(\$E10>=80.5 = F(\$E11>=80.5	= F(\$F6>=80.5 = F(\$F7>=80.5 = F(\$F8>=80.5 = F(\$F9>=80.5 = F(\$F10>=80.5 = F(\$F11>=80.5	= F(\$G6>=80.0 = F(\$G7>=80.0 = F(\$G8>=80.0 = F(\$G9>=80.0 = F(\$G10>=80.0 = F(\$G11>=80.0	=AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C	= RANK(\$H22,\$ = RANK(\$H23,\$ = RANK(\$H24,\$ = RANK(\$H25,\$ = RANK(\$H26,\$ = RANK(\$H26,\$		
£\$	=IF(\$C6>=80. =IF(\$C7>=80.5 =IF(\$C8>=80.5 =IF(\$C9>=80.5 =IF(\$C10>=80 =IF(\$C11>=80 =IF(\$C11>=80 =IF(\$C12>=80	数字 =IF(\$D6>=80.5 =IF(\$D7>=80.5 =IF(\$D8>=80.5 =IF(\$D9>=80.5 =IF(\$D10>=80.5 =IF(\$D11>=80.5 =IF(\$D11>=80.5 =IF(\$D11>=80.5	=IF(\$E6>=80.5 =IF(\$E7>=80.5 =IF(\$E8>=80.5 =IF(\$E9>=80.5 =IF(\$E10>=80 =IF(\$E11>=80 =IF(\$E12>=80	=IF(\$F6>=80.5 =IF(\$F7>=80.5 =IF(\$F8>=80.5 =IF(\$F9>=80.5 =IF(\$F10>=80.5 =IF(\$F11>=80.5 =IF(\$F11>=80.5 =IF(\$F11>=80.5 =IF(\$F11>=80.5	=IF(\$G6>=80,0 =IF(\$G7>=80,0 =IF(\$G8>=80,0 =IF(\$G9>=80,0 =IF(\$G10>=80,0 =IF(\$G11>=80,0 =IF(\$G11>=80,0 =IF(\$G12>=	=AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C	=RANK(\$H22,\$ =RANK(\$H23,\$ =RANK(\$H24,\$ =RANK(\$H25,\$ =RANK(\$H25,\$ =RANK(\$H26,\$ =RANK(\$H27,\$ =RANK(\$H27,\$		
£\$	=IF(\$C6>=80. =IF(\$C7>=80.5) =IF(\$C8>=80.5) =IF(\$C9>=80.5) =IF(\$C10>=80.5) =IF(\$C11>=80.5) =IF(\$C11>=80.5) =IF(\$C12>=80.5) =IF(\$C13>=80.5)	数字 =IF(\$D6>=80.5 =IF(\$D7>=80.5 =IF(\$D8>=80.5 =IF(\$D9>=80.5 =IF(\$D10>=80.5 =IF(\$D10>=80.5 =IF(\$D10>=80.5 =IF(\$D10>=80.5 =IF(\$D11>=80.5 =IF(\$D12>=80.5 =IF(\$D13>=80	=IF(\$E6>=80.5 =IF(\$E7>=80.5 =IF(\$E8>=80.5 =IF(\$E9>=80.5 =IF(\$E10>=80 =IF(\$E11>=80 =IF(\$E12>=80 =IF(\$E12>=80	=IF(\$F6>=80.5 =IF(\$F7>=80.5 =IF(\$F8>=80.5 =IF(\$F9>=80.5 =IF(\$F10>=80, =IF(\$F11>=80, =IF(\$F11>=80, =IF(\$F12>=80, =IF(\$F12>=80,	=IF(\$G6>=80.0 =IF(\$G7>=80.0 =IF(\$G8>=80.0 =IF(\$G9>=80.0 =IF(\$G10>=80.0 =IF(\$G11>=80.0 =IF(\$G11>=80.0 =IF(\$G11>=80.0 =IF(\$G11>=80.0 =IF(\$G11>=80.0 =IF(\$G11>=80.0 =IF(\$G11>=80.0 =IF(\$G11>=80.0 =IF(\$G11>=80.0 =IF(\$G11>=80.0	=AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C	=RANK(\$H22,\$ =RANK(\$H23,\$ =RANK(\$H24,\$ =RANK(\$H25,\$ =RANK(\$H26,\$ =RANK(\$H26,\$ =RANK(\$H27,\$, =RANK(\$H28,\$ =RANK(\$H29,\$		
£\$	=IF(\$C6>=80. =IF(\$C7>=80.5) =IF(\$C8>=80.5) =IF(\$C9>=80.5) =IF(\$C10>=80.5) =IF(\$C11>=80.5) =IF(\$C11>=80.5) =IF(\$C12>=80.5) =IF(\$C13>=80.5)	数字 =IF(\$D6>=80.5 =IF(\$D7>=80.5 =IF(\$D8>=80.5 =IF(\$D9>=80.5 =IF(\$D10>=80.5 =IF(\$D11>=80.5 =IF(\$D11>=80.5 =IF(\$D11>=80.5	=IF(\$E6>=80.5 =IF(\$E7>=80.5 =IF(\$E8>=80.5 =IF(\$E9>=80.5 =IF(\$E10>=80 =IF(\$E11>=80 =IF(\$E12>=80 =IF(\$E12>=80	=IF(\$F6>=80.5 =IF(\$F7>=80.5 =IF(\$F8>=80.5 =IF(\$F9>=80.5 =IF(\$F10>=80, =IF(\$F11>=80, =IF(\$F11>=80, =IF(\$F12>=80, =IF(\$F12>=80,	=IF(\$G6>=80.0 =IF(\$G7>=80.0 =IF(\$G8>=80.0 =IF(\$G9>=80.0 =IF(\$G10>=80.0 =IF(\$G11>=80.0 =IF(\$G11>=80.0 =IF(\$G11>=80.0 =IF(\$G11>=80.0 =IF(\$G11>=80.0 =IF(\$G11>=80.0 =IF(\$G11>=80.0 =IF(\$G11>=80.0 =IF(\$G11>=80.0 =IF(\$G11>=80.0	=AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C =AVERAGE(\$C	=RANK(\$H22,\$ =RANK(\$H23,\$ =RANK(\$H24,\$ =RANK(\$H25,\$ =RANK(\$H26,\$ =RANK(\$H26,\$ =RANK(\$H27,\$, =RANK(\$H28,\$ =RANK(\$H29,\$		
	=IF(SC6>=80.6 =IF(SC7>=80.6 =IF(SC8>=80.5 =IF(SC9>=80.5 =IF(SC10>=80.6 =IF(SC11>=80 =IF(SC12>=80 =IF(SC12>=80 =IF(SC14>=80 =IF(SC14>=80 =IF(SC14>=80 =IF(SC15>=80	数字 =IF(\$D5>=80.5 =IF(\$D7>=80.5 =IF(\$D8>=80.6 =IF(\$D10>=80 =IF(\$D10>=80 =IF(\$D11>=80 =IF(\$D11>=80 =IF(\$D13>=80 =IF(\$D13>=80 =IF(\$D13>=80 =IF(\$D13>=80 =IF(\$D15>=80	= F(\$E6>=80.5 = F(\$E7>=80.5 = F(\$E8>=80.5 = F(\$E9>=80.5 = F(\$E10>=80 = F(\$E11>=80 = F(\$E11>=80 = F(\$E13>=80 = F(\$E14>=80 = F(\$E14>=80 = F(\$E15>=80	= IF(\$F6>=80.5 = IF(\$F7>=80.5 = IF(\$F8>=80.5 = IF(\$F9>=80.5 = IF(\$F10>=80.5 = IF(\$F10>=80.5 = IF(\$F11>=80.5 = IF(\$F12>=80.5 = IF(\$F13>=80.5 = IF(\$F14>=80.5 = IF(\$F15>=80.5 = IF(\$F15>	= F(\$G6>=80,# = F(\$G6>=80,# = F(\$G6>=80,# = F(\$G6>=80,# = F(\$G6>=80,# = F(\$G1>=80,# = F(\$G1>=80,# = F(\$G12>=80,# = F(\$G13>=80,# = F(\$G14>=80,# = F(\$G15>=80,# = F(=AVERAGE (\$C =AVERAGE (\$C =AVERAGE (\$C =AVERAGE (\$C =AVERAGE (\$C =AVERAGE (\$C =AVERAGE (\$C =AVERAGE (\$C =AVERAGE (\$C	= RANK(\$H22.\$ = RANK(\$H23.\$ = RANK(\$H24.\$ = RANK(\$H24.\$ = RANK(\$H25.\$ = RANK(\$H26.\$ = RANK(\$H26.\$ = RANK(\$H27.\$ = RANK(\$H27.\$ = RANK(\$H28.\$ = RANK(\$H28.\$ = RANK(\$H29.\$ = RANK(\$H30.\$		
舎 軒	=IF(SC6>=80.6 =IF(SC7>=80.6 =IF(SC8>=80.5 =IF(SC9>=80.5 =IF(SC10>=80.6 =IF(SC11>=80 =IF(SC12>=80 =IF(SC12>=80 =IF(SC14>=80 =IF(SC14>=80 =IF(SC14>=80 =IF(SC15>=80	数字 =IF(\$D6>=80.5 =IF(\$D7>=80.5 =IF(\$D8>=80.5 =IF(\$D9>=80.6 =IF(\$D10>=80 =IF(\$D11>=80 =IF(\$D11>=80 =IF(\$D12>=80 =IF(\$D13>=80 =IF(\$D14>=80	= F(\$E6>=80.5 = F(\$E7>=80.5 = F(\$E8>=80.5 = F(\$E9>=80.5 = F(\$E10>=80 = F(\$E11>=80 = F(\$E11>=80 = F(\$E13>=80 = F(\$E14>=80 = F(\$E14>=80 = F(\$E15>=80	= IF(\$F6>=80.5 = IF(\$F7>=80.5 = IF(\$F8>=80.5 = IF(\$F9>=80.5 = IF(\$F10>=80.5 = IF(\$F10>=80.5 = IF(\$F11>=80.5 = IF(\$F12>=80.5 = IF(\$F13>=80.5 = IF(\$F14>=80.5 = IF(\$F15>=80.5 = IF(\$F15>	= F(\$G6>=80,# = F(\$G6>=80,# = F(\$G6>=80,# = F(\$G6>=80,# = F(\$G6>=80,# = F(\$G1>=80,# = F(\$G1>=80,# = F(\$G12>=80,# = F(\$G13>=80,# = F(\$G14>=80,# = F(\$G15>=80,# = F(=AVERAGE (\$C =AVERAGE (\$C =AVERAGE (\$C =AVERAGE (\$C =AVERAGE (\$C =AVERAGE (\$C =AVERAGE (\$C =AVERAGE (\$C =AVERAGE (\$C	= RANK(\$H22.\$ = RANK(\$H23.\$ = RANK(\$H24.\$ = RANK(\$H24.\$ = RANK(\$H25.\$ = RANK(\$H26.\$ = RANK(\$H26.\$ = RANK(\$H27.\$ = RANK(\$H27.\$ = RANK(\$H28.\$ = RANK(\$H28.\$ = RANK(\$H29.\$ = RANK(\$H30.\$		
	=IF(\$C6>=80.6 =IF(\$C7>=80.6;C7>=80.6;C7>=80.6;C7>=80.6;C7>=80.6;F(\$C3>=80.6;F(\$C3>=80.6;F(\$C10>=	数字 =IF(\$D5>=80.5 =IF(\$D7>=80.5 =IF(\$D8>=80.6 =IF(\$D10>=80 =IF(\$D10>=80 =IF(\$D11>=80 =IF(\$D11>=80 =IF(\$D13>=80 =IF(\$D13>=80 =IF(\$D13>=80 =IF(\$D13>=80 =IF(\$D15>=80	= F(\$E6>=80.5 = F(\$E6>=80.5 = F(\$E6>=80.5 = F(\$E6>=80.5 = F(\$E10>=80 = F(\$E11>=80 = F(\$E12>=80 = F(\$E12>=80 = F(\$E12>=80 = F(\$E14>=80 = F(\$E14>=80 = F(\$E15>=80 = F(\$E15>=80 = F(\$E15>=80 = F(\$E15>=80 = F(\$E15>=80	=IF(\$F6>=80.5 =IF(\$F7>=80.5 =IF(\$F8>=80.5 =IF(\$F9>=80.5 =IF(\$F10>=80.5 =IF(\$F11>=80.5 =IF(\$F12>=80.5 =IF(\$F12>=80.5 =IF(\$F12>=80.5 =IF(\$F12>=80.5 =IF(\$F14>=80.5 =IF(\$F15>=80.5 =I	= IF(\$G6>=80.6 = IF(\$G7>=80.6 = IF(\$G8>=80.6 = IF(\$G9>=80.6 = IF(\$G10>=80 = IF(\$G10>=80 = IF(\$G12>=80 = IF(\$G12>=80 = IF(\$G14>=80 = IF(\$G14>=80 = IF(\$G14>=80 = IF(\$G15>=80 = SUM(G\$22:G	=AVERAGE(SC =AVERAGE(SC =AVERAGE(SC =AVERAGE(SC =AVERAGE(SC =AVERAGE(SC =AVERAGE(SC =AVERAGE(SC =AVERAGE(SC =AVERAGE(SC	= RANK(\$H22.\$ = RANK(\$H23.\$ = RANK(\$H24.\$ = RANK(\$H24.\$ = RANK(\$H25.\$ = RANK(\$H26.\$ = RANK(\$H26.\$ = RANK(\$H27.\$ = RANK(\$H27.\$ = RANK(\$H28.\$ = RANK(\$H28.\$ = RANK(\$H29.\$ = RANK(\$H30.\$		

図1 表計算アプリケーション練習用の教材例(筆者作成)

先にも記したように、本講義はいわゆる文系の学生を対象に文章作成アプリケーション・表計算アプリケーション・プレゼンテーションアプリケーションの操作を習得させることを目的としているが、講義の事前アンケートの結果通り、表計算アプリケーションの操作でつまずくことが多い。

図1は2018年度に使用した教材の一部分である。表計算アプリケーションで if 関数を使用して計算をさせる課題であるが、こうした条件式を用いての処理は、表計算アプリケーションの操作の基礎であるともいえる。今までに自分が担当した学生に限れば、こうした処理について高等学校までの段階で理解・習得していないことが多い。更にいうならば、キーボードでの文字入力に不慣れという学生も若干名確認している。

平成22年の「高等学校学習指導要領解説 情報編」では、高等学校における情報教育について「学習指導要領総則における規定も、基本的な操作や情報モラルを身に付けさせることを明記」(第1章「総説」第1の4の(2))しており、「小・中・高等学校の各段階で情報活用の実践力に偏るのではなく、情報の科学的な理解や情報社会に参画する態度をバランスよく身に付けさせる教育の実現を求める」(第1章「総説」第1の4の(2))として、下記のように規定している。

○ 小学校学習指導要領第1章「総則」第4の2の(9)

各教科等の指導に当たっては、児童がコンピューターや情報通信ネットワークなどの情報手段に慣れ親しみ、コンピューターで文字を入力するなどの基本的な操作や情報モラルを身に付け、適切に活用できるようにするための学習活動を充実するとともに、これらの情報手段に加え視聴覚教材や教育機器などの教材・教具の適切な活用を図ること。

〇 中学校学習指導要領第 1 章「総則」第4の2の(10)

各教科等の指導に当たっては、生徒が情報モラルを身に付け、コンピューターや情報 通信ネットワークなどの情報手段を適切かつ主体的、積極的に活用できるようにする ための学習活動を充実するとともに、これらの情報手段に加え視聴覚教材や教育機器 などの教材・教具の適切な活用を図ること。

○ 高等学校学習指導要領第1章「総則」第5款の5の(10)

各教科・科目等の指導に当たっては、生徒が情報モラルを身に付け、コンピューターや情報通信ネットワークなどの情報手段を適切かつ実践的、主体的に活用できるようにするための学習活動を充実するとともに、これらの情報手段に加え視聴覚教材や教育機器などの教材・教具の適切な活用を図ること。

このように規定された旧学習指導要領下で学んだ学生が、基礎的なアプリケーションの 使用に不慣れであること、キーボードでの文字入力が覚束ない学生が少なくないことを考 えると、旧学習指導要領下での現場の指導に何らかの課題があったと考えざるを得ない。

現在の学生がこのような状況にある原因は改めて検討し対応策を講じる必要があろうが、こうした学生が存在している現況下であれば、新学習指導要領で定められた小学校でのプログラミング教育の展開は、まず「パソコンを操作する」ことの基礎から児童に習得させることを改めて徹底すべきであり、綿密な計画を作成した上で基礎的な操作を確実に習得させる必要があろう。前出山口・橋本論文®内では、幼稚園児の保護者を対象としたタブレット型端末を利用した幼稚園での遊びに期待する効果についてのアンケート結果がみえる。「工夫協力」が51%、「仲良く」が49%、「イメージ言葉」と「活動楽しむ」とが46%、「考え行動」が38%と、感情の表現・思考の外化、あるいは意見を表出させるツールとしては認識されてはいない。これは、同じ保護者を対象に行われたアンケート「家庭でのタブレット型PCの用途」の結果で、「テレビ・動画」が51%と最も高く、「撮影(22%)」「ゲーム(21%)」と続くことから考えると、いわゆる「スマホ育児」としての用途が主であり、家庭において「感情の表現・思考の外化、あるいは意見を表出させるツール」としてはほとんど使用されていない(「お絵かき」「数・言葉あそび」「パズル」「音楽」の回答率は、いずれも10%台に留まる)。

両アンケートの結果をみる限り、家庭においてのタブレット型パソコンの使用は既存の

玩具や視聴覚機器の延長に過ぎないと考えるべきであろう。

幼稚園児がスマートフォンやタブレット型パソコンに触れる機会を増やすことは、情報機器を操作する経験を早期から積むことであり、情報機器への抵抗を減らすためにも必要な活動であると考えられる。プログラミング教育を開始する小学校での教育への接続を想定したタブレット型パソコンの使用、具体的にはアンケートで10%台の回答に留まった「お絵かき」「数・言葉あそび」「パズル」「音楽」を目的とした使用の中で、幼児にタッチペンの使用やソフトウェアキーボードを用いての文字入力を経験させる場面を多くするべきであろう。

(4)3 問目で「心配や不安がある」と答えた方は、簡単で構いませんので理由を教えてください。

4 問目は 3 問目で「プログラミング教育を展開することに関して心配や不安がある」と回答した学生を対象にした記述式の設問である。以下に回答を全て挙げる。②と同じく、回答には $a \sim p$ の記号を振った。

- a. 自分がプログラミングに疎いため。
- b. プログラミングも人に教えられるレベルではないため不安。
- c. 自分が教えられる技量を持っていなかったら、子供たちに教えることができるかわからないから。
- d. 自分自身がそれらの使用に詳しくなく生徒に教えられない。
- e. 知識がない。
- f. 専門性がない。
- g. 教師が正しい知識を伝えることができるのか。
- h. 教師ではなく、外部の講師を呼ぶのがよいと思う。学校の教師にそんな時間 はほとんどない。
- i. 適切な指導ができるかどうか。
- i. 操作を完璧にこなせる自信がないから。
- k. そこまで器用ではない。
- 1. イマイチイメージができない。
- m. 自分が受けたことがないのでイメージができていない。
- n. 指導の仕方がイメージできない。
- o. 大学で指導を受けていない。
- p. プログラミングが苦手な子供にどのようにサポートするか。

回答 a から k までで「自分が理解していないことを児童に指導できるのか」という不安が目立つ。先の講義前アンケートのデータと重ね合わせると、中学校・高等学校までで「自分はコンピューターの操作が苦手」であり「今後も不安」というイメージを持つ学生が一

定数存在することになる。先に挙げたような規定を持った現行指導要領下での中学校・高等学校の授業を受けてきている学生が不安を覚えているという現状からは、現場にも一定の割合でプログラミング教育に不安を覚えている教員が存在すると考えるべきであろう。

回答hの「学校の教師にそんな時間はほとんどない」も、ゼロからプログラミング教育の教材を作成し、授業準備を行うことを考えれば、教員の負担増でしかなく、不安材料となることは理解できる。

回答 $l\sim n$ の「指導方法がイメージできない」という回答は、これは現在小学校が抱えている問題でもあろう。更には回答 o の「大学で指導を受けていない」とも関連する課題である。

(5)プログラミング教育は「必要な論理的思考力を身に付ける」ことが目的ですが、これについて、意見や感想があれば教えてください。

本問は、新学習指導要領に記された「(プログラミングを体験しながら)論理的思考力を身に付けるための学習活動」(第1章「総則」第3の1の(3)イ)に関しての意見を記述してもらうための設問である。様々な意見が記され、プログラミング教育に肯定的なもの・否定的なものが揃った。また、プログラミング教育に対する視点も、教育学部生という学部の性格からか教員となる個人の側の問題と児童の側の問題との双方の視点からの回答があった。

- a. プログラミングにおいて必要的な論理的思考力を身に付ける上で、国語力が 前提条件として必要になるのではないだろうか?
- b. 論理的な思考は数学で身に付く。
- c. 中学技術の時間からでも十分であると思う。
- d. 絶対に論理的になれるかどうかは分からないけれど、ある程度の効果はある と思う。機械が思ったように動かせないときに機械が悪いのではなく、自分 の扱いが悪いと分かるようになると思う。
- e. 自分が受けたプログラミング教育にはそのような意図があるとは感じなかった。
- f. これまでのそういった授業で必要な力をみにつけられていない。
- g. プログラミングの授業は社会で必要なスキルとして学ぶものだと認識していた。
- h. パソコンを使うことも授業の1つになるなんて、時代がどんどんデジタル化しているのだなと考える。
- i. そもそものプログラミングに対する適性の問題から「論理的思考力を身につける」に至らない児童生徒も出てくると思う。
- j. あやふやすぎることに加え、プログラミング教育でなくても賄える。
- k. プログラミングでいう論理的な思考とは何なのか。

- 1. その目的は、これからの社会に必要な力だと思う。
- m. コンピューターは確かに便利だが、コンピューターによる処理に頼りすぎて しまうと人間の考える力が低下するのではないか。
- n. 教師が共通認識を持って行うことができればいいと思う。

プログラミング教育に対する不安を記した回答が散見される。その原因には、先に述べたような「パソコンの操作に熟達しているわけではない」ことが挙げられよう。また、プログラミング教育は新学習指導要領からの導入ということもあり、授業のイメージがしづらかったようにも思われる。

以上、筆者の勤務校の学生に対して行ったアンケートと、担当講義における学生の状況を元に、新学習指導要領下の小学校で実施されるプログラミング教育に対する不安について概観してみた。こうした不安について、以下、章を変えて考えてみたい。

3. 「プログラミング教育」の課題

前章では筆者の勤務校の学生にプログラミング教育についてのアンケートに答えてもらい、そのアンケート結果の分析を元に、現在「プログラミング教育」が持つ不安について考えてみた。以下では更に具体的な問題点について考えてみたい。

現在、小学校の教育現場でプログラミング教育を展開する上での問題点と類似の不安が、 上記のアンケート結果に現れていると考えられる。つまり「教える側の知識・技術」の問題である。

加えて、実際に小学校でプログラミング教育を実施する際には、授業で使用可能なコンピューターが何台あるのか、授業中にハードウェアのトラブルが発生した際に対応できる体制が整備されているか等といった問題もあろう。ハードウェアのトラブルへの対応は授業用のコンピューターの予備機を多めに用意することで可能ではあろうが、2020年は基本ソフト (OS) の入れ替え時期であり90、予算的にどれほどの台数を確保できるのかの見通しは不透明であろう。

先のアンケート②で「C 言語を用いた情報操作を小学生で習うと受け止められている」といった回答があった。新学習指導要領・手引ともに言語の指定は確認できない。現在、プログラム言語は 1500 種類ほどが存在するとされる¹⁰⁾。情報誌が読者を対象に「普段使っているプログラミング言語」についてのアンケートを実施したところ、「C/C++」「JavaScript」をはじめとした 24 種(「その他」を除く)が挙がっている¹¹⁾。これらは使用する場面・目的に応じて開発されており、「このプログラミング言語を習得しておけば、他は不要」という性格のものではない。また、日々新しい言語が開発されており、現在、小学校でのプログラミング教育との相性のよさから人気の Scratch(開発:MIT メディアラボ)も、開発は 2006 年とプログラミング言語としては新しい部類に入る。

先に Scratch をはじめとした「ビジュアルプログラミング言語」が『手引』で推奨されていることを触れたが、Scratch では入力機器のうちマウスを使用することが多く、結果

的にキーボードでの入力に熟達できない、あるいは熟達速度が遅れるのではないかという 不安が生じる。

先にプログラミングは、パソコンに命令をし、特定の作業を実行させる行為であると述べた。 先のアンケート⑤に「プログラミングでいう論理的な思考とは何か」という回答が

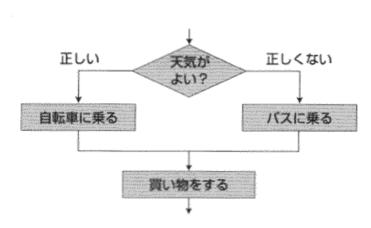


図2 日常におけるフローチャート(流れ図)の一例

あったが、プログラミングでいう「論理」とは「処理」を行うための「条件」であり、条件を組み合わせることで処理が進行してゆくート(流れ図)」は、この処理で、流れを図にしたものので、流れを図にして引用したとして引用したよし悪して移動方法を変えることであることである。

を示すものである $^{12)}$ 。こうした処理や処理変更の条件を示すことが、いわゆる「プログラミング的思考」である。

このように条件や処理を図示することは、他の教科でも活用が期待できる。算数・理科 といった理数系教科だけではなく、国語・社会といった文系教科においても、思考の過程 を示す手法として活用すべきであろう。

4. プログラミング教育のマネジメント

小学校の新学習指導要領では、プログラミング教育として以下の5つが例示されている。

A (小学校) 学習指導要領に例示されている単元等で実施するもの

- A-① プログラミングを通して、正多角形の意味を基に正多角形をかく場面 (算数 第5学年)
- A-② 身の回りには電気の性質や働きを利用した道具があること等をプログラミング を通して学習する場面 (理科 第6学年)
- A-③ 「情報化の進展と生活や社会の変化」を探究課題として学習する場面 (総合的な学習の時間)
- A-④ 「まちの魅力と情報技術」を探究課題として学習する場面 (総合的な学習の時間)
- A-⑤ 「情報技術を生かした生産や人の手によるものづくり」を探究課題として学習 する場面 (総合的な学習の時間)

「学習指導要領に例示されている単元等で実施するもの」として例示されたもの (A) の他、「学習指導要領に例示されてはいないが、新学習指導要領に示される各教科等の内容

を指導する中で実施するもの」として(B)、「教育課程内で各教科等とは別に実施するもの」(C)等が規定されている¹³⁾。新学習指導要領に示される指導内容は、教師と児童とがある程度のコンピューターの操作技術を習得していることが前提となっているように思われる。例えば(A)で規定された算数の授業では前出のScratchを使用する例が示されている。Bにみえる音楽の授業の例においては「様々なリズム・パターンを組み合わせて、まとまりのある音楽をつくるという課題を設定し、プログラミング言語又は創作用ソフト等を用いて音楽をつくることが考えられます」とある。では、児童はこうしたコンピューターの操作技術やプログラミング言語について初等教育のどの段階で習得すべきであろうか。

以下の図 3 は木村明憲著、黒上晴夫・堀田龍也監修の『情報学習支援ツール:実践カード&ハンドブック』¹⁴⁾ にて紹介された、情報活用の実践力を育成することにつながる学習活動を学年ごとの表に整理した教師向けの資料である。

同資料は、初等教育の学年ごとに到達すべき情報処理の段階が整理されており大変に有 用である一方、表に提示された情報機器を活用するためには、児童の一定の技術の習得が 必要であろうし、習得のための時間配分も求められよう。つまり、この表の「枠外」にあ る(表の前提になっているともいい得る)技術・知識の習得なくしては、画餅に終わりか ねない。ローマ字の学習後にキーボードを使用する(つまり、ローマ字入力を念頭に置い ている)ことを計画しているためか、第2学年まではキーボードの使用を避けている。全 ての児童がそうであるとは断言できないが、現在の児童は幼少期からスマートフォンやタ ブレット型コンピューターに接している可能性が高いと考えられる。現在ではタブレット 型コンピューターを使用しての実践例も紹介され始めているが150、第1・第2学年におい てもタブレット型コンピューターのソフトウェアキーボードを使用しての文字入力を検討 してもよいのではないだろうか16)。また、多くのタブレット型コンピューターは外部モニ ターの使用が可能であり、アップル社 iOS 以外のタブレット型コンピューターの多くで は、USB や Bluetooth を介してのキーボードとマウスの接続・使用が可能(現在、iOS で マウスは使用できない)である。学年が進み児童がローマ字を学習した後は、前出図3の 第3学年以降の活動にみえるアプリケーション上での文字入力作業には、中学校・高等学 校での情報学習を念頭に置き、タブレット型パソコンにモニターと物理キーボードとを接 続してパソコンの使用感に慣れさせることも検討すべきであろう。

キーボードの使用について述べたが、他にもこうした情報機器の操作に関するカリキュラムを編成する際には、入力機器の使用・アプリケーションの使用といったパソコンの操作スキルをはじめ、デジタルカメラやスキャナー、プリンターやあるいは外部記憶装置の操作を習得してゆくことも不可欠である。「作業の中で習得できる」という意見はもちろんあろう。しかし、基礎的な操作の習得の時間を省いたり、習得の是非を確認せずに終わらせたりすることは、後々、「パソコン嫌い」の児童を生み出し、プログラミング教育の実施以前に問題を生じさせる。

■図8

		1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
情報4	方法を選ぶる	・実物を見て情報を 集める。・人に質問して情報を集める。・デジタルカメラで 撮影して情報を集める。	・デジタルカメラを活用して必要な情報を静止画に撮影して集める。 ・手紙を書いて情報を 集める。 ・気付いたことや聞いたことをメモに書き取りながら情報を集める。	・準備をしてインタビューを して情報を集める。 ・見学をして情報を集める。 ・実験して情報を集める。 ・実験して情報を集める。 ・デジタルカチで静止風、音 声を記録して情報を集める。 ・様々な図書や辞書を使って 情報を集める。	・アンケートを作成、回収して情報を集める。 ・インターネットで情報を集める。 ・デジタルカメラで静止画、動画を撮影したり、録音したりして情報を集める。	・電子メールで情報 を集める。 ・適切なICTを選択し て情報を集める。	•適切なICTを選択 し、特性を生かしな がら情報を集める。
情報を集める力	集めた情報	・観察して情報を取り出す。 ・絵や写真から情報 と取り出す。 ・文章から情報を取り出す。	・観察・計測して情報を取り出す。 ・絵や写真と文章を照応させて必要な情報を取り出す。 ・文章から必要な言葉や文を抜き出す。	・絵や写真、文章、図、表、グラフ、映像などの資料から情報を取り出す。 ・聞いたことや読んで集めた情報から更に知りたいことを質問する。	・アンケートから必要 の情報を取り出す。 ・今までに経験した情報を集める方法から,適切な方法を選択して情報を集める。	・漢字辞典で情報を取り出す。 ・新聞記事から情報を取り出す。 ・統計資料から情報を取り出す。 ・図・表・グラフと文章を関連さ せながら情報を取り出す。	・自分の考えとの共 通点や相違点を明 らかにしながら情 報を取り出す。
	整理する	・絵や写真を並び替えたり置き換えたり するなどの操作をして情報を整理する。 ・矢印や囲みをつかって情報を整理する。 ・キーワードを基に花びらチャートなどを使って情報を整理する。	・大切な言葉、文章を付箋・カードや ノートなどに取り出し、整理する。 ・取り出した情報を基に図に整理する。 ・キーワードを基にウェビング などを使って情報を整理する。	・必要な実例(事柄)を集めて分類し、整理する。 ・書かれていることや考えていることを比較し、整理する。	・表やグラフに表して、整理する。 ・集めた情報を配列して、整理する。 ・必要な情報と不必要な情報を 区別し、分類して整理する。	・集めた情報の全体を見通して必要なものを選択する。 ・集めた情報を目的に応じて比較したり、分類したり、配列したりして、整理する。	・集めた情報を再構成する。
	方法を選ぶ	・ノート等の紙に 文,図,絵などを かいて情報をま とめる。	・ノート等の紙に 文、図、絵、表、グ ラフなどをかいて 情報をまとめる。	・文書作成ソフト等のアプリ ケーションソフトを立ち上げ、 文字を入力したり、写真を挿 入したりして情報をまとめる。 ・プレゼンテーションソフトを 使って4枚程度の簡単な提 示資料にまとめる。	・アプリケーションソ フトの特性を生かし て情報をまとめる。	・アプリケーションソ フトを積極的に活 用して情報をまと める。	・適切なアプリケー ションソフトを選択 し、特性を生かしな がら情報をまとめ る。
情報をまとめる力	情報の表し方	・絵日記にまとめる。 ・簡単な手紙にまとめる。 ・ちらしにまとめる。	説明文にまとめる。観察記録文にまとめる。紹介文にまとめる。伝える相手と伝える内容を明確にして手紙にまとめる。	 手紙や電子メール、はがきを書くときに必要な事柄を把握してまとめる。 ・報告文にまとめる。 ・簡単なポスター、リーフレット、パンフレットまとめる。 ・簡単な新聞にまとめる。 	・報告文の型に沿って、絵や写真、文章、図、表、グラフなを組み合わせてまとめる。 ・新聞の目的と特性を理解し、絵 や写真、文章、図表でまとめる。 ・写真と文章を対応させて リーフレットにまとめる。	・活動報告書にまとめる。・提案書にまとめる。	・絵や写真, 文章, 図, 表, グラフ, キャッチ コピーなどの特徴 や効果を意識して パンフレットをまと める。
<i>J</i> J	伝わりやすくまとめる	・キーワードを意識 したり, 語と語の続き方に注意したりして, 簡単な文章にま とめる。	・はじめ・中・おわりの構成で文章をまとめる。・絵や文章, 写真などを組み合ながらませれらまなもながらまる。・順序を表す表現を用いてまとめる。	・文献を参照し、引用してまとめる。・大切な言葉や部分を強調してまとめる。	・敬体と常体が混在しないようにまとめる。 ・引用したり要約したりしてまとめる。 ・吹き出しをつけたり、色を変えて分類したりしてまとめる。	・引用したり、実例を挙げたりして、根拠を示してまとめる。 ・考えと根拠を区別してまとめる。 ・グラフや表を引用してまとめる。 ・複数の資料を組み合かせて新しい資料にまとめる。 ・失印を効果的に使ってまとめる。 ・矢印を効果的に使ってまとめる。 ・伝えたい順序や強調したい部分に、番号や配号、印などを入れてまとめる。	・注や引用などの情報を加えて、意見が説得力をもったまとめる。 ・出来事などの描写けてまとめる。 ・出来事などの描写けてまとめる。 ・キャラクターや記号、マークなどを作成し、挿入する。
	方法を選ぶ	・実物を見せて伝える。 ・簡単な劇で伝える。 ・実物投影機等のICTで 拡大提示して伝える。	デジタルカメラ, 実物投影機等のICTで拡大提示して伝える。	・プレゼンテーション ソフト等でまとめた 資料を提示して伝 える。	・電子資料や紙にま とめた資料をICTを 活用して伝える。	・適切なICTを選択して伝える。	・適切なICTを選択して特性を生かしながら伝える。
情報を伝える力	伝える	・受け手の方を見ながら、話して伝える。 ・姿勢や口径を意識 して話し、伝える。	・伝えたいことを明確にして、そのことを意識して伝える。 ・声の大きさ、話す速さ、顔の向きに注意して、はっきりした発音で伝える。 ・受け手が見やすいように立つ場所や、提示する場所などを考えて伝える。 ・黒板に書いたり、提示したものを指し示したりして伝える。	・敬体と常体を適切に 伝い分けて伝える。 ・相手を見て、大な言葉や部分を強調 して伝える。 ・言葉の抑揚、声の大をきさ、側の取りたる。 ・多振り手振りを入れて伝える。 ・カモな、	・受け手の表情、視線、しぐさなどの反応を見ながら伝えたい部分を指し示すなどの工夫をして伝える。・注目してほしいところに〇ヤアンサながら伝える。・友だちの意見と自分の意見を関連させながら伝える。	・必要に応じて共通語を使うなど、場に応じた海に応じた高値のな言葉づかに、伝えたいま柄に注目するような工夫をして伝応を確認、い受け手の反機を変に説明を結成して伝える。	・相手や場に応じて 適切に敬語を使っ て伝える。 ・受け手の反応を確 認しながら,問いか けや指し示し、書き 込みなどをして伝 える。
	伝え合う	・聞いたことを基に感想を伝え合う。 ・書かれたことを読み合い感想 を伝え合う。	・伝えたいことを明確にして、そのこと を意識して伝える。	・書いたものを読み 合い感想を伝え合 う。	・手紙に書いて伝える。	・書いたものを読み 合って助言し合う。	・書いたものを読み合い,表現の仕方に着 目して助言し合う。

図3 木村明憲著、黒上晴夫・堀田龍也監修『情報学習支援ツール 〜実践カード&ハンドブック』P49掲載図

平成 29 年 2 月に公開された「小学校におけるカリキュラム・マネジメントの在り方に関する検討会議報告書」の「本報告書のねらい」には、教育課程に基づき組織的・計画的に教育活動の質の向上を図るカリキュラム・マネジメントの位置づけとして、「教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連の PDCA サイクルを確立すること」の一文がみえる。プログラミング教育における Plan-Do-Check-Action サイクルの構築は小学校における今後の実践の積み重ねの中で知識や技術が蓄積されよう。しかし、PDCA サイクルを回す以前の Research が不足していては、適切な Plan を企画することができない。児童がプログラミング教育に取り組む以前に、児童が情報機器をどの程度操作できるか、パソコンやアプリケーションについての知識をどの程度持っているかを適切に把握しなければ、どのような授業を設定しようと期待された教育効果を得ることは不可能であろう1つ。小学校において児童が蓄積した情報機器に関する知識や技術は、中等教育につながってゆくことが望まれよう。以下、章を変えて、小学校におけるプログラミング教育と中学校の技術科との接続について考えてみたい。

5. 今後の課題 ―結論に代えて―

ここで、『手引』における、プログラミング教育の姿勢について再度確認しておきたい。

ア コンピューターを用いずに行う指導の考え方

コンピューターを用いずに行う「プログラミング的思考」を育成する指導については、これまでに実践されてきた学習活動の中にも、例えば低学年の児童を対象にした活動などで見いだすことができます。ただし、学習指導要領では児童がプログラミングを体験することを求めており、プログラミング教育全体において児童がコンピューターをほとんど用いないということは望ましくないことに留意する必要があります。コンピューターを用いずに「プログラミング的思考」を育成する指導を行う場合には、児童の発達の段階を考慮しながらカリキュラム・マネジメントを行うことで児童がコンピューターを活用しながら行う学習と適切に関連させて実施するなどの工夫が望まれます180。

『手引』は指導要領の解説と同様、法的な拘束力を持たないため、「学習指導要領では 児童がプログラミングを体験することを求めて」いても、実際の教育現場では「(プログ ラミング教育において)児童がコンピューターをほとんど用いない」事例が多くなるので はなかろうか。ここまでにみてきた教員側の知識・技術不足、環境の不備、そして「学校 の裁量に任されている」がその理由として挙げ得る。

小学校の新学習指導要領第1章「総則」第3の1の(3)において、小学校におけるプログラミング教育が新学習指導要領に記された「情報活用能力など全ての学習の基盤となる

資質・能力を重視すること」を育成するための要素として位置づけられたが、小学校で育成された情報活用能力は中学校においてどのように活用されるのであろうか。

平成33年度に完全実施となる中学校の新学習指導要領第2章技術分野第2「内容」のDでは、中学校の技術科の情報単元を以下のように規定している。

第2 各分野の目標及び内容

[技術分野]

- 2 内容
- D 情報の技術
- (1) 生活や社会を支える情報の技術について調べる活動などを通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。
- ア 情報の表現、記録、計算、通信の特性等の原理・法則と、情報のデジタル化 や処理の自動化、システム化、情報セキュリティ等に関わる基礎的な技術の仕組 み及び情報モラルの必要性について理解すること。
- イ 技術に込められた問題解決の工夫について考えること。
- (2) 生活や社会における問題を、ネットワークを利用した双方向性のあるコンテンツのプログラミングによって解決する活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。
- ア 情報通信ネットワークの構成と、情報を利用するための基本的な仕組みを理解し、安全・適切なプログラムの制作、動作の確認及びデバッグ等ができること。 イ 問題を見いだして課題を設定し、使用するメディアを複合する方法とその効果的な利用方法等を構想して情報処理の手順を具体化するとともに、制作の過程や結果の評価、改善及び修正について考えること。
- (3) 生活や社会における問題を、計測・制御のプログラミングによって解決する活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。
- ア 計測・制御システムの仕組みを理解し、安全・適切なプログラムの制作、 動作の確認及びデバッグ等ができること。
- イ 問題を見いだして課題を設定し、入出力されるデータの流れを元に計測・制御システムを構想して情報処理の手順を具体化するとともに、制作の過程や結果の評価、改善及び修正について考えること。

平成 20 年公示の旧中学校指導要領第 2 章「各教科」第 8 節「技術・家庭」の D の(3) 「プログラムによる計測・制御について」に規定された「ア コンピューターを利用した計測・制御の基本的な仕組みを知ること」「イ 情報処理の手順を考え、簡単なプログラムが作成できること」といった記述と比較すると、明確に内容が拡充されている。また、

プログラミング作業だけではなく、デバッグ能力の習得も規定されている。これは「プログラミングの経験がある」から「プログラミングを理解している」段階への移行を示しており、今後中学校の現場に投入される教材の内容次第ではあるが、生徒にはそれなりの知識が求められよう。小学校段階での情報教育が不十分であると、まず中学校の技術科で、更には高等学校の情報でつまずいてしまう可能性が高い。よって、小学校の段階で必ずパソコンやアプリケーションの基礎的な操作を習得させなければならないだろう。デバッグでいえば、ビジュアルプログラミング言語ではエラーメッセージが表示されないことがあるが、エラーメッセージを表示するプログラミング言語に触れておき、プログラムを修正する方法についても経験しておくことが、スムーズな作業につながろう。

小学校におけるプログラミング教育はパソコンの操作技術や関連知識の蓄積なしには実を結ばないことが想像される。プログラミングそのものの指導のためにも、事前の Research を重視した計画を作成し、効果的にパソコンの操作技術や関連知識の蓄積を図り 得るカリキュラムの構築が必要であろう。

¹⁾ 山口好和、橋本忠和(2018)「豊富な情報環境下での「プログラミング教育」への期待と不安:教師・保護者への簡易調査と「ガイド書籍」の比較作業から」『北海道教育大学紀要 教育科学編』69(1), pp.11-18.

^{2) 『}デジタル版イミダス2018』 (2018) ,集英社,「プログラミング [カタカナ語]」.

^{3) 『}手引』は、http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/1403162.htm に て公開されている。

⁴⁾ 注 3) 書, p.2.

⁵⁾ 注3) 書, p.4.

⁶⁾ 論考をまとめたものとしては、教育技術編集部編集 (2018) 『総合教育技術 増刊:新 学習指導要領時代の間違えないプログラミング教育』小学館 がある。

⁷⁾ 前掲 山口、橋本(2018), p.12.

⁸⁾ 前掲 山口、橋本(2018), p.13.

^{9) 2020} 年 1 月 14 日に Microsoft Windows 7 のサポートが終了するため、基本ソフト (OS) を再インストールによる対応だけではなく、コンピューター本体ごと交換することも想像されよう。

¹⁰⁾ 増井敏克(2018) 『プログラミング言語図鑑』ソシム.

¹¹⁾ 安藤正芳 (2018) 「インサイトプログラミング言語利用実態調査: 1000 人調査でみたトレンド」『日経 system』(308),日経 BP 社,pp.50-57.

¹²⁾ 谷尻かおり著、谷尻豊寿監修 (2018) 『改訂 3 版 これからはじめるプログラミング基礎の基礎』技術評論社, p.134.

¹³⁾ A~Fの分類や具体的な事例については、「学校を中心としたプログラミング教育ポータル」https://miraino-manabi.jp/example/c を参照されたい。

^{14) 2016}年12月, さくら社。

¹⁵⁾ 増田覚(2019)「ICT 機器を活用した「しかけ」づくり」『視聴覚教育』(856), 日本視聴覚教育協会, pp.62-63.

「ビスケット」 (開発:デジタルポケット) とタブレット端末とを使用した実践報告がされている。

17) 児童だけではなく、教員も「自分がどの程度情報機器を操作できるのか」「自分は情報機器についてどの程度の知識を持っているのか」の確認をするべきであろう。必要であれば、あるいは情報処理技術者試験(実施:独立行政法人情報処理推進機構)の受験なども検討されるべきかもしれない。また、高等教育の場においても「初等情報科」を設け、小学校におけるプログラミング教育の実践についての研究を進める必要があろう

18) 注 3) 書, p.19.

2018 年度 KJC ランドの運営を振り返って 第 1 報 - 学生を対象としたアンケート調査結果から--

穴水ゆかりⁱ・篠木真紀ⁱⁱ・岩野布美子ⁱⁱⁱ・白川和希^{iv} 進藤信子^{iv}・吉川修^v・井上薫^{vi}

1. はじめに (調査の目的)

2014年度から開催されてきた「KJC ランド〜子どものあそびの日〜」は、今年で5年目を迎えた。

これまでは現 A 校舎の多くの教室を使用して朝から夕方まで行い、来場者 $300\sim600$ 名にのぼった大規模な行事として実施してきた。今年度は校舎耐震工事等の都合により、体育館の他には B 校舎 1 階の 1 室を使用、おおむね午前中のみの時間帯で行い、来場者は 200 名程度という、例年と較べると規模の小さな行事となった。同時に教員の異動に伴い、これまで主体となって KJC ランドを運営してきたゼミが存在しなくなったことから、KJC ランド運営委員会を立ち上げ、委員が主体となって実施した。

幼児教育学科内の状況が大きく変化した中で、今後も KJC ランドを存続させるのか、存続させるのであればどのように運営していくべきかを議論する必要があると考えられた。そこで来年度は行事の主体となる1年生及び、昨年度のようすを知るため今年度の運営と比較できる2年生を対象に、今年度の反省と来年度の KJC ランドのあり方を考えるための一助とする目的で調査を実施した。

2. KJC ランドとは

「KJC ランド〜子どものあそびの日〜」とは、「釧路短期大学」の英語表記 "Kushiro Junior College" の頭文字からつけられた名称で、釧路短期大学を会場に子どもたちが楽しく遊べる 1 日をつくることを目的として 2014 年度より開始された。

幼児教育学科で長く実施されてきた「子どものためのオペレッタ」をバージョンアップして、学生が企画・運営する、子ども達が自由に自分のあそびの世界を体験できる場として企画された。

この企画の目的を、西塔正一前学長は初年度配布のプログラムにおいて次のように説明している。「最近の子ども達は、相手の立場にたつという理解や感受性、そして相手に対する対応能力の欠如が言われ、想像力と主体的な対応・行動力を育てる『遊び』の重要性が発達心理学者からも指摘されています。本学幼児教育学科のような保育者養成機関にとって重要なことは、子ども達の遊びなどを通して、全面的な発達や最善の利益を保障する支援・教育活動を構成できる人材を養成しなければならないということです。本学でも、そのような意図をもって教育活動を展開しています。」「1年生は入学時から今日までの学びの集大成および実習前の主体的学習(指導案作成、制作、模擬演習等)に関する貴重な実践の機会として、また2年生は、就職前に自分の教育力や実践力、実際の現場で発生するであろう問題を解決する能力(問題発見、教育・保育計画の作成、介入、評価能力等)をさらに磨く機会として行われます。」

i 幼児教育学科専任講師

[¨] 幼児教育学科専任講師 ¨ 幼児教育学科教授

iv 幼児教育学科専任講師

v 幼児教育学科教授 vi 幼児教育学科准教授

vii 幼児教育学科教授

例年では、1 月第 3 日曜日、10 時から 15 時までの時間帯に行われていた。資料によると初年度は、学生による企画コーナー「舞台」、遊べるおもちゃを作る「工作」の他、学外団体の協力を受けて「くしろの木であそぼう」、「絵本と児童図書のばくりっこ」の特設コーナーを設置した。会場は現在のA 校舎を使用し、2 年生 5 グループによる舞台が 308 号室で行われた。詳細は不明だが、ステージ企画の内容は今年度と変わらないものであったと考えられる。3 つのゼミ室にて総合案内と展示、 $201 \cdot 202 \cdot 203 \cdot 204$ 号室で工作や展示等が行われ、お化け屋敷コーナーも設置された。障害福祉サービス提供事業所や業者による昼食販売が行われ、第 2 回目のみとなったが、本学臨床栄養学ゼミによる限定 100 食の「釧路短大オリジナル弁当」が提供された年もあった。

その後、お化け屋敷コーナーは迷路コーナーとなり、スタンプラリーや古本市、昼食販売等も行われるようになった。使用教室も増えて規模は拡大していったが、基本的な体制等に大きな変化はなかったようだ。

2018 年度は 9 時 30 分開演、12 時 40 分終了として、学外団体の協力を受ける企画は行わず、3 施設による軽食販売のみを行った。ステージ企画と工作は体育館にて実施し、この他には休憩室と授乳室を B 校舎 1 階に設けるのみとした。

3. 2018 年度の KJC ランド運営について

(1)2018 年度 KJC ランド実施の見通しがつくまで

「KJC ランド」は第1回目より、1年生の必修単位である「保育内容総論」、2年生の幼稚園教諭免許取得のための必修授業である「保育・教職実践演習」等、実習関連の授業の一環として位置づけられてきた。授業の一環といいながら、2014年度から 2017年度までは、地域教育研究ゼミの担当教員とゼミに所属する学生が主体となって行事全体を立案、実施してきたが、第5回目となる 2018年度には教員の異動に伴い、この地域教育研究ゼミは廃止となった。また、2018年の春から始まった校舎耐震工事の進捗状況が不安定であったことから、後期の授業や学校祭、そして KJC ランドで使用が可能な教室等施設の見通しが立たなくなった。このような状況の中で、KJC ランドそのものが実施可能であるのかという見通しも不透明なものになった。

2018 年度前期の時点では、KJC ランド実施の可否も不透明の状況にあった。しかし授業計画では、①これまで1年生の「保育内容総論」で行ってきた子ども向き制作物の指導案演習 ②2 年生の「保育・教職実践演習」で各グループが演劇的なステージ発表と子どもが工作やダンス等で参加する、30~40 分間の「楽しい保育活動の提供(発表)」 という学習成果を示す場を確保し、それらを公開して、地域の子どもたちと触れ合う時間をもつ機会は、最低限もつことを予定していた。後者は例年、本学の附属幼稚園と、本学とは系列関係にある貝塚幼稚園の協力により、実践発表の場として幼稚園児を対象としたグループ発表を行ってきたものである。

(2)KJC ランド実施の見通しがついてから

9月を過ぎてようやく校舎耐震工事の終了時期の見通しが立ち、例年通りの時期に実施することは可能と判断された。同時に、これまでのゼミ主導による実施は不可能であるため、どの教員が主担当となり、どのような学生が主体となって運営するのかという議論が学科教員の中で始まった。

ようやく9月18日の学科会議において、実施は例年通りの1月20日(日)、会場は体育館を使用し、1年生が製作ブースを担当し、2年生はステージ発表を行うという方向性が定まってきた。また、例年、本学附属幼稚園と貝塚幼稚園で行われてきたグループ発表は12月12日(水)に実施するという案が出され、これらを10月第1回目の「保育内容総論」「保育・教職実践演習」の場で学生に伝えることになった。9月26日に開かれた学科会議では、幼稚園との日程調整の結果、グループ発表の日取りが12月5日(水)に変更することが周知された。これはこの頃、体育館工事の進捗状況が当初の予定よりも遅れていたことから、学校祭(緑輝祭)の実施が例年より1か月遅い12月22日に遅延された

ためである。先述した 2 つの幼稚園におけるグループ発表から、学校祭までの期間を可能な限り空けることにより、時間的な余裕を確保する必要があると考えた。また、グループ発表の翌週に各グループが反省の場をもち、その反省を KJC ランドに活かすために発表内容の修正をするための時間を年内にもつことも、グループ発表の時期を 1 週間前倒しした理由であった。

このような流れによって、学生に KJC ランドの今年度実施と当日までのスケジュールが周知されたとき、行事実施までの期間はすでに 4 か月前を過ぎていた。

(3) KJC ランド運営委員会の始動

実施まで約3か月前となった10月18日の学科会議で、第1案目の実施要領が篠木講師より示された。篠木講師は2018年度に本学に赴任したため、前年度までのKJCランドを経験していない。また、ゼミによる運営が不可能となったため、実習内容研究の各学年6グループの代表1名及び有志1名が運営委員になり、彼ら13名により構成される運営委員会主体でKJCランドを運営、実施することになった。

2018 年度の KJC ランドを運営委員会主導とした理由は、これまで主体となって運営してきた地域教育研究ゼミの廃止ばかりではない。運営方式を検討するにあたり、第 1 回から第 4 回までの KJC ランドの運営資料や反省等を振り返った。学生から寄せられた反省には「運営するゼミが主催で、他の学生は自分の持ち場だけやればよく、ゼミのイベントのようであった」「1 年生と 2 年生の交流がない」といった意見が記載されていた。

2018年度は主催するゼミがなくなり、KJC ランドは幼児教育学科の授業の一環としてカリキュラムされていることを鑑みて、学科会議で話し合った。それらを踏まえ、次の通り 2 つのねらいを設定した。すなわち、①一部の学生に負担を偏らせず、学生全員が運営にかかわる。 ②1年生は 2 年生のステージ発表を見て、次年度の運営やステージ発表の実践に生かすことができるように会場を設定する。

「保育内容総論」「保育・教職実践演習」では例年、各学年を6グループに分けて、授業において活動・実践してきた。ねらい①については、このグループから代表1名を運営委員として選出し、さらに希望者を募ることにより運営委員会を組織することとした。運営委員や会計担当者は、あえて学生会や学校祭の実行委員等の役員ではない学生から選出した。これは大きな行事が続いたことから、一部の学生に負担がかからないよう配慮したためでもある。

運営の仕事はこれまでの運営資料をもとに提案し、第3希望までを記載するよう伝えた上で、各グループを対象に希望調査を行った。その結果を受けて、各グループの担当を振りわけた。前日準備や当日の動きなどについては、前年度までの実施にかかわる資料をもとに作成した。

ねらい②は、前年度の KJC ランド実施後に学生からとったアンケートの声をもとに設定した。また、2018 年度運営委員会でも、これまでの KJC ランドまでは A 校舎の複数の教室を利用して企画が行われていたため、1 年生には 2 年生のステージ発表をみることができず、映像が残っているとしても上級生の実践から学ぶことが難しいとの声が出た。そのため、2018 年度 1 年生の工作と 2 年生のステージ発表の双方を体育館にて行うことにした。

また、例年の開催時間は9時30分から15時で、各グループが自分の出番前に登校して、担当する企画や作業等が終わればそれぞれ解散となっていた。2018年度は開催時間を9時から12時40分と短縮するかわりに、当日も学生全員が開場前の準備から後片付けまですべての作業を行うことにした。運営にかかわる各担当にはなるべくそのグループの教員が担当するように配慮しながら、1・2年生の各グループをチラシやプログラムの作成、各会場設営等の担当として配置した。前年度まではゼミの活動時間に進められてきた準備は、「保育内容総論」「保育・教職実践演習」の他、授業のない空き時間等に各グループがそれぞれ進めていくことになった。

(4)KJC ランド当日まで

第1回目の KJC 運営会議はすでに当日まで 3 か月もない 11 月1日だった。もはや運営委員による協議によって実施への方向性を定めるための時間的な猶予がないため、篠木講師が具体的な実施要領を作成した。運営委員会の開催は、1, 2 年生の授業が入っていない時間帯である、月曜日の 1 講目、すなわち 9 時 30 分から 10 時 20 分に行った。

第2回運営会議は11月12日だった。運営委員の召集にはLINE株式会社によるソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)のLINEを用い、学生たちの空き時間である月曜の朝などに委員会を行うという、常に慌ただしい状況の中にあった。連絡の方法としてLINEを用いた理由は、学生はメール未開封や電話に出ないことが多いためである。

KJC ランドの実施に向けて、運営委員は委員会で協議した内容や結果をグループの学生に伝えるとともに、グループの学生たちの声を委員会の場で反映させながら協議をして準備を進めていった。

4. 調查結果

(1)調査対象者

行事終了後の授業時間に、1年生49名、2年生50名に質問紙を配布した。学生はその場で記入して提出、または記入後に担当教員の研究室に持参、提出した。

回収率は81.6%(男子1名、女子39名)、96.0%(男子2名、女子46名)だった。

(2)回答から得られた結果

- 1)グループの仕事内容について
- ①事前・当日に行った仕事の内容 以下の表では、「ステージ発表」「工作ブース」にかかわる業務は除外した。

表1 事前・当日に行った担当業務と、その具体的な仕事の内容

	に行うに超当来初と、こ			
担当業務	具体的な作業内容			
体育館	ブースのしきり	マットを敷く	ゴミ箱の管理	
受付	受付・販売コーナー 設置	アンケート BOX 製 作		
トイレ	案内表示等	掃除	ペーパー補充	
壁面	体育館等の飾りつけ			
会場案内	案内図作成	「立入禁止」の設置		
案内・宣伝	ポスター作り	チラシ作り	封筒の宛名書き	プログラム作成
駐車場	看板作り	配列のため自車を 駐車	駐車場係	看板の飾りつけ
授乳・休憩室	飾りつけ	休憩室の場所案内 作成		
その他	全体の把握	モップ掛け	学校祭の飾りを 借用	ゼミの飾りを 借用

②前日・当日になってから予定外で増えた仕事

予定外で増えた仕事の多くは受付や案内、見守り等だった。この他、時間になっても担当者が姿を見せないため、急遽、仕事に就いてカバーした学生もいた。

表 2 予定外についた業務と、その具体的な仕事の内容

担当業務	具体的な仕事内容			
体育館	ステージの片づけ	見守り	シール貼り	
工作ブース	ブースの集客	工作の追加製作		
受付	来客者の案内	受付業務	メダル交換	
	玄関・靴置きの表示	アンケート回収	メダルの箱の装飾	アンケート箱の説明掲示
その他	校内の飾りつけ	飾りつけの移動	ゴミ箱の設置	

③作業で使用した道具、物品等

約1か月前に開催された学校祭で使用した装飾、「昔話ゼミ」がイベント用に作製した展示物、「アートゼミ」の学生が活動の一環として創作した作品等も、体育館や廊下の装飾や展示品、遊び道具として使用した。

表3 作業で使用した道具、物品等

用途・使用教室等	<u> </u>	具体的な物	品	
機械類	パソコン	プリンター		
工作用具	ハサミ	カッター	定規	
	色ペン・マッキー	色鉛筆	クレヨン	
工作用消耗品	模造紙	画用紙	段ボール	新聞紙
	のり	ボンド	セロハンテープ	ビニールテープ
	養生テープ	床面装飾用幅広テープ	百円均一商品の 花	飾りつけの紙
通信用消耗品	封筒			
清掃用品等	雑巾	使い捨て手袋		
休憩・授乳室	木のプール	床用ウレタンマット	絵本	おむつ台
トイレ	幼児用便座	トイレットペーパー		
案内等	ホワイトボード	ボード用ペン	三角コーン	ロープ
その他	衝立	運搬用車		

④来年度への改善点、個人やグループとしての反省等 おもな回答は表 4~9 の通りである。

表 4 個人やグループとしてよかった点

①事前準備

- 事前に準備できていた
- 当日、あまり焦ることがなかった。

②連携·協力体制

- ・協力して活動できた。
- ・みんなで協力して片付けや準備をして早く終わってよかった
- ・全員で仕事ができたのでスムーズに進行できたと思う。
- ・子どもや保護者など多くの参加者に対して全員で関われた。

③会場·進行

- ・すべて体育館でやったことから、工作もステージもお客さんは少ない移動で楽しめた。
- あるもので装飾ができた
- ・ステージの時間帯に臨機応変に対応できた

表 5 反省点、来年度への改善点:連携と仕事の分担について

①学生間、学生と教員間の連携

- ・グループ内、教員と学生、学年間の連携・連絡不足(多数)
- ・業務や連絡事項等について、運営委員がわかっていないことがあった(複数)
- ・連絡事項の内容が、毎回変わっていてとまどった。
- ・事前にあった指示から、事前・当日の仕事内容の変更などが多かった(複数)
- ・パーテーションを使うグループで数の配分を明確化
- ・もう少し早く運営委員からグループに情報をおろしたほうがよかった。

②仕事分担

- ・細かく分担を決めたのに意味がなかったと思う。臨機応変に行うなら、そこまで決めなくてよかった と思う。
- ・当日、分担にはなかった役割が増えて交代してくれる人がおらず、長時間仕事をした(類似の回答複数)
- ・仕事が被って何もしない時間が多かった(類似の回答複数)
- ・2年生は暇だった(類似の回答複数)
- ・工作時間または劇の時間が分かれていると、どっちかの学生がやることがなくなる時間がある。前半 に劇が終わってしまうと、片付けまでやることがなくなり、ただ暇な時間になる。
- ・みんなにもう少し仕事をまわせればよかったと思う。

表 6 反省点、来年度への改善点:準備開始~前々日までの準備状況

①事前の打ち合わせ

- ・事前に当日の詳しい動きなどを確認しておいたほうがよいと思う。
- 当日あわてることがあったので、みなで打ち合わせをしたほうがよい

②事前準備の開始時期・準備状況等

- ・前日の準備、伝達が少なすぎることで当日、急に決まったことがとても多かった。
- ・準備を早く進めればよかった。(自身の反省と、学科や運営に責任を求める声、いずれも複数)
- ・何日か前から飾りなどを準備する
- ・準備はじめが遅かったので、来年は早めに始め、余裕をもって準備を終わらせたいと思う。
- ・もう少し準備期間が欲しかった。
- ・前日になってから準備することがとても多く、少し大変だった。

表 7 反省点、来年度への改善点:前日の準備、会場設営

①会場設営時の必要物品:来年に向けた覚書

- ・全体:前年の写真や資料があればイメージしやすかったのではと思った。
- ・パンフレット:字数制限がある
- ・当日配布の来客者用チラシ: ステージと工作の時間を記入。
- ・休憩室:ゴミ箱を設置すればよかった、アメを置いておけばよかった。
- ・駐車場: (当初みつからず作ったが) 丈夫な看板がある。
- ・工作ブース:看板は子どもが見やすいように大きく作る。靴の脱ぎ履きが多いのは来場者にとって 大変かもしれない。椅子が少なくて立ち膝でやっていた子がいたので気になった。
- ・アンケート BOX: 口のところに入れるようにしたが、普通にしたほうがいい。
- ・ステージ: 3階までの上げ下ろしが大変なうえに狭く、不要だった(2年)
- ・迷路:今年はないと知り残念に思う来場者がいた
- ・トイレ:遠い。
- ・清掃等:雑巾をとても使った。
- ・装飾:買いすぎた・足りなくなった

②会場設営において

- ・工作スペースは2年生が早くセッティングしないと1年生はいつまでもブースの飾りつけをできないので、前々日位にはセッティングするべきだと思った。
- 清掃などの準備をしておくとよい

表8 反省点、来年度への改善点: KJC ランド当日

①来場者に対して

- もっと子どもたちと接すればよかった。
- より子どもが楽しめるように声かけに工夫をするべきだった。

②進行

- ・2年のステージ発表のときも工作ができるといい。
- ・もっと時間で交代したり、工作で劇の時間を調整したらよい。
- ・前半はステージのみ、その後に工作と分けたほうがよいと思う。交互にやると時間を守ることができない子どもがいてなんて声をかければよいかわからなかった。

③前日業務

- ・体育館:劇を見ている時に短大生がマットの上に座っていると外部からのお客さんが遠慮したり、よくわからず戸惑っていた。短大生はマットで見ないようにするか、マットの上へ誘導する人を設置したほうがよいかなと思った。
- ・駐車場:誘導はインカムがあれば良いと思った。 冬に40分間の駐車場係は寒い。
- ・休憩室:見守りの時間が、事前の打ち合わせと当日で違った。
- ・受付他: 急に駆り出されることがあったようなので、役割分担を全体で確認していくとよいと思った。

案内役など具体的にシフトを決めたほうがよいと思う。

・集計係: KJC が終わってから集計するため、安心感から忘れてしまっていたことを反省している。

④ステージ発表

- ・ステージの時間が短い。余裕のある準備が必要。
- ・舞台の時間配分をうまくできなかった
- ・リアクションを大きくする。余裕のある準備をすべきだった。
- ・劇中に少し気が抜けてメンバーと笑っていたことがあったので、気をつけたいと思った。
- ·練習不足(複数)

⑤後片付け

- ・休憩室の片づけの時間が早かった。後から来た人を戸惑わせてしまったり、作業を手伝わせてしまった。
- ・終了後の後片付け時、体育館の上でずっとスマホをいじっている人が何人かいた。
- ・マットなどの置き場(片付けの把握ができていなくて)がわからず混乱して、準備・片付けの時間がかかった。
- ・最後解散するときにグダグダしたので、片付けが終わったら解散、みんなで集まったら解散など決めたらよかったと思う。

表 9 反省点、来年度への改善点:その他

①行動、積極性

- ・自分自身に積極性や、考えて行動することが足りなかった(複数)
- ・1年生は KJC がどういうものかわからず 2年生が主になって動いていた。1年生がもっと動けるようにしたほうがよいと思う。

②日程・振替休日について

- ・振替休日があったほうがよいと思う。(複数名)
- ・工事のためなのか、ちょうど忙しい時期だったのでもう少し調整してほしい。
- ・8:45 に全員が来る必要はなかった。もっと係の決め方があったのかなと。「劇があるから受付できない。無人になってしまうから埋めてほしい」とか、事前にわかることだし急に言われても…と思った。

③その他

- ・KJC に対して何をしたら良いのか運営委員に頼りすぎて1人ひとりの意識が欠けていたと思った。当日の動きがわからなくて効率が悪いと思った。
- ・生徒主体なのか、先生方主体なのかわからない。
- ・土日も登校しているのに振替休日もないし段取り悪いし、なくてもよいのでは。
- ・来年は幼稚園とKJCの劇の内容を変えないほうがよいと思った。

表 4③のコメントにある「あるもので装飾ができた」とは、1 か月前に開催された学校祭で使用した物品や装飾品の活用や、ゼミで学生が作成した作品や、イベントの際に来場した子どもたちのために展示していた作品等により、会場の装飾がより充実したものになったという意味である。学生会やアートゼミ、昔話ゼミなどの協力を受けたことからも「皆で協力して実施した」という思いをより強くしたのではないだろうか。

2018 年度は 12 月に準備を始め、耐震工事によるスケジュール変更のため学校祭 (緑輝祭) が冬休み直前の 12 月末に実施された。こうした時間の少ない中で「事前に準備ができていた」「当日、あまり焦ることがなかった」と、事前準備が十分にできていたのだとすれば、規模を縮小したとはいえ、学生たちが協力して効率よく準備を進めたものと評価できるだろう。このような好評価は 1 年生に多かった。

反省点や改善点にかかわる記述では、昨年の KJC ランドを経験している 2 年生からの不満が強く、教員や運営委員の学生など、他者に対する不満や批判を記述した学生も 2 年生に多くみられた。

先述した事情により、過去4年間実施されてきたKJCランドとは規模や使用会場、企画内容等を変更することになったため、これまでとは運営方法も変更することになった。各グループが担当する仕事の詳細についてはそれぞれで考えてもらうことにしたが、準備作業の内容や当日のようすをイメージすることが難しく、計画立案や準備がなかなか進まないために、教員から提案を受けることが多くなり、その結果「先生主導のイベント」という印象が残ったのではないだろうか。

2018年度は時間割等により不可能だったが、表 6①については、1,2年生全員が一堂に会した打合せを行うことが望ましかったと考えられる。今後も授業の一環として2つの学年が協力して本イベントを運営するならば、担当する教員数やメンバーの問題が解決するならば、後期時間割の組み方を考える、つまり1年生の「保育内容総論」と2年生の「保育・教職実践演習」を同じ曜日と時間に組むこと等も可能かもしれない。

表 9②にある通り、「振替休日があったほうがよいと思う」と複数名から記載があった。 学生は土曜授業の後に前日準備を行い、日曜日に KJC ランド、週明けは通常授業の他に複数の定期試験が行われ、翌週、1 年生には 5 日間の見学実習があった。幼児教育学科は保育現場での実習が多いため、春から秋にかけての実施は難しい。2018 年度は 12 月末に学校祭があり、冬休みが明けてすぐには実施できず、2 月になると、早くも就職先で見習いを始める 2 年生が出てくる。このようにさまざまな事情があった上での日程設定だったが、土曜日の実施など、日程の設定についてはまだ考える余地があるだろう。

学生からは「当日の動きがわからなくて効率が悪いと思った。」「生徒主体なのか、先生 方主体なのかわからない。」といったシビアな声もみられた(表 **9**③)。

前日までの準備や当日の動きについては、教員サイドにも予想しきれなかった部分もあった。このため事前に気づいて学生に対して助言・指導することができず、前日や当日になって気づく作業や役割等もあった。当日は急遽、その場にいて手が空いている学生に声をかけて対応してもらったほか、前日や当日の状況をみて、自ら臨機応変に対応していた学生もいた。が、その一方で、急な予定の変更に対する学生からのクレームが出ていた。

たとえば前日の準備作業では想定していたよりも早い時間に講義が終了していた 1 年生が、「2 年生が大変そうだから代わりに」と、まだ講義中だった 2 年生のかわりに会場の設営を行った。しかしそれを知らずに講義の終了後、予定通りに重いテーブルなどを運びながら設営会場にやってきて、すっかり設営が終了していた状況を目にした 2 年生からは怒りの声が上がった。また、来場した子どもが工作ブースで1つ作品を仕上げるとシールを1枚貼ってもらえる「シールラリー」では、来場者が想定よりもかなり下まわっていたという状況をみて、ある学生が途中から貼るシールの枚数を増やした。この変更については他の学生にも伝えていたが、学生全体には伝わっていなかったため、変更時にはその場にいなかった学生から「聞いていない」という不満の声が上がった。やむを得ず臨機応変の対応を要する場面はどのような行事においても起こりうるが、100名の学生に対する情報の共有の難しさをあらためて感じることになった。

⑤学生全員がかかわった、2018年度の運営方式(運営委員会方式)について おもな回答は表 10 及び表 11 の通りである。運営委員会には各グループから委員を 1 名 の代表と希望者 1 名による組織設定をした。

反省点や改善点は、昨年の KJC ランドを経験した 2 年生からの記載に多かった。

表 10 よかったと感じた点

①運営委員としての業務

- ・運営委員を先頭にやっていてとてもよかったと思う。
- ・各グループの代表として役割を果たすことができた点がよかった。
- ・グループの中に1人運営委員がいて、情報を伝達する方法は効率がよくてよいと思う。(複数)
- ・ 運営委員会は何度も集まって話し合いを行い、委員の人たちで確認しあったり当日も協力してできたと 思うのでよかったと思う。

②業務分担·協力体制

- ・みんなで協力して作業を行っていた。(複数)
- ・役割があったことで、偏ることなく一人ひとり仕事ができたと思う。(複数)
- 流れがスムーズで動きやすかった。
- ・運営委員だけが頑張るのではなく、グループごと仕事があり、協力して作りあげることができてよかったと思う(複数)。
- ・全員でやることで来年度への見通しがもててよかった。

③情報伝達

- ・各グループから運営委員を選出することで情報がスムーズに伝わった。(複数)
- ・SNS を上手に活用して、情報が伝達できてよかった(複数)

表 11 よくなかったと感じた点

①運営委員に対して感じたこと

- ・何をやるのかわからないなど伝わらないこともあるし、運営委員ばっかりに責任を押しつけたりして いる部分があると思った。
- ・運営委員が積極的に行動していたが、負担も大きかったのではないかと思う。(複数)
- ・運営委員が運営というよりも、先生が決めて私たちが実行するというふうに思えた。
- ・誰が主に当日の動きや指示をまとめているのかわからなかった。

②運営委員会方式について

- ・委員の負担や役割の多さを感じた。ゼミ運営のほうがいいと思った。
- ・やはりきちんと学生会や去年まであったゼミのような専門組織が必要だと思う。
- ・ (運営委員会方式はよかったと思うが) 学生主体でもっと自分たちで決めていけるような KJC ランドだともっとよかった。
- ・指示する人がいない、先生や運営に訊いてもわからないと言われるため、学校祭の学生会や運営のようにはっきりとした運営委員を立てたほうがよかった。

③情報伝達

- ・運営委員からの話がグループまで伝わらなかった、うまく伝達されていなかった(多数)
- ・運営委員会の人だけ知っていることが多くあって、全体に伝わっていなかった。(複数)
- ・もう少し早めに指示を出してもらえたら助かった。(複数)
- ・ぎりぎりになって話が変わっていたり、運営委員の人も何もわからない状況のことがあった。
- ・先生と学生で話が食い違っていたりしたので、全員に連絡したほうがいいと思った。
- ・教員によって言っていることが異なり、全体としての行動がわからなかった。
- ・情報がわからなかったことが多く、立ち止まっていることが多かった。やることのわりに時間が足りなかった。
- ・ 運営委員会の中で予定と違うことをしたり、予定が取りやめることになったが結局やる等ということがあった。
- ・必要なことを前日に少人数にしか伝えず全体に伝わっていなかったなど大変だった。
- ・前回聞いた内容とそのときに聞いた内容が違うことが多々あった。

④その他

- ・運営委員での集まりも少なく、1年生と2年生のお互いの顔も名前もわからなかった。
- ・運営委員会方式は、KJCのことを知っている先生が担当してほしかった。

表 10 でみられるとおり「皆で協力して作業し、運営委員が当日までの運営をまとめていった」という意味内容の意見も複数あった。2 年生からは運営委員に対する感謝の記述もみられたが、好意的な意見の多くは1年生によるものだった。

また、「SNS を上手に活用して、情報が伝達できてよかった」(表 10③)という意見も複数みられた。運営委員会の連絡手段として LINE の利用を選んだ理由は、学生は必ずしも電話に出ないこと、メールを見るまでに時間がかかる学生がいるためだった。手元にスマートフォン等があればすみやかに閲覧する学生が多い LINE を用いたことにより、運営委員会の教員と学生の連絡や、運営委員の学生から各グループの学生たちとの情報共有が速やかに行われた。

一方、表 11④には「運営委員会方式は、KJC のことを知っている先生が担当してほしかった」という声もあった。が、これまで特に KJC ランドの運営にかかわっていた教員は異動し、イベントの内容も大幅に変更されているため、主担当が KJC ランド経験者の教員であったとしてもやはり混乱がみられた可能性はあり得るだろう。

2018 年度 KJC ランドは、前年度よりすでに実施が危ぶまれており、実施の決定が学生に周知されるまで半年以上の期間があった。このため、特に前年度の KJC ランドを経験した 2 年生のモチベーションを維持できなかったことも、特に 2 年生による不満が多かった一因と考えられる。準備期間が短く、学生が企画の提案や工夫をする場面が少ないため、教員主導とならざるを得ない場面がしばしばあった。

今後は新年度が始まった頃から KJC ランドの実施に向け、学生たちが時間的余裕をもって主体的に準備を進めていくことが可能になるだろう。準備のための時間も、学生たちにとって成長の場となるようサポートしていきたいと考えている。

2018年度は回避できなかったことも含めて反省点も多い KJC ランドとなったが、では 学生たちは、来年度の KJC ランド開催についてどのように考えているのだろうか。

(3)来年度の KJC について

来年度はどのように KJC ランドを開催して運営するのがよいと思うか、表 12 のとおり 5 点について質問した。

1年生半数は「①2018年度と同じように開催」と答えた。2年生は約30%だった。「②校舎全体を使用して実施」と答えたのは1年生約16%、2年生約35%、「④来年度廃止」と回答したのは、1年生の20%弱、2年生の11%だった。「その他」と回答した学生はおもに、冬の感染症流行期であることや、後期試験、1年生の見学実習の時期であることから、「時期をずらして実施」したほうがよいと回答した。

表 12 来年度の実施について(質問項目)

- ①今年度と同じように開催するほうがよい。
- ②会場規模は、昨年度のように校舎全体を使って実施したほうがよい。
- ③仕事分担では、1年生は工作を担当して、2年生は半数が舞台に、半数が運営委員会にかかわるのがよい。
- ④来年度は KJC を実施しないほうがよい。
- ⑤その他

表 13 来年度の実施について

	①今年度と 同じ	②校舎全体を 使用	③1 年製作 2 年舞台と運営	④来年度廃 止	⑤その他
1年生(40名)	48.8%	16.3%	7.0%	18.6%	9.3%
2年生(48名)	30.4%	34.8%	15.2%	10.9%	13.0%

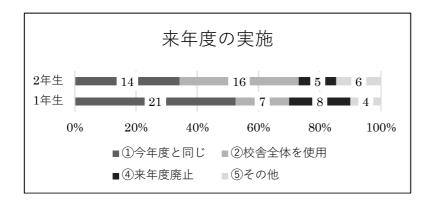


表 14 回答の理由等(自由記述)

①会場規模:今年度通り、主に体育館で開催

- ・目が行き届き、ようすを把握しやすい(1年4名、2年生2名)
- ・会場がわかりやすい(1年1名、2年2名)
- ・工作とステージの行き来は、小さい子を連れている方にはつらそうなので。 (1年)
- ・保護者や子どもたちが移動しなくてすむ。(2年2名)
- ・1年生もステージを見ることができる(2年5名)
- ・準備・片付けが楽(2年2名)
- ・KJC を担当するゼミがないため、ちょうどよい規模だと思う。 (2年)

②会場規模:昨年度通り、校舎全体を使用

- ・規模が大きいほうがたくさんの人が来てもらえるきっかけになるため。(1年)
- ・体育館だけでは狭い/スペースが広いほうがよいと思う(1年5名、2年2名)
- ・工作とステージの教室を分ける:子どもたちが活動に集中できない/工作とステージ、それぞれのみをしたい子どもがいるため。 $(1 \pm 2 \pm 2 \pm 2 \pm 2)$
- ・劇は308で行ったほうがよいと思う(1年、2年)
- ・体育館の空気が汚れているため。(2年)

③仕事分担:1年生は工作、2年生は半数ずつ舞台と運営委員会にかかわる

- ・1年生は KJC 自体に慣れていないため。 $(1\overline{4})$
- ・運営委員の仕事が多いと感じたため/仕事がより均等になると思うため。(2年4名)

④来年度は廃止する

- ・テストや実習が立て込んでいる時期だから(1年4名)
- ・風邪やインフルエンザ流行期だから(1年5名)
- ・日曜日がないのはつらいから (1年)
- ・KJC への不満(必要性、内容、運営他)(2年4名)

⑤その他

実施の時期をずらしたほうがよい (1年4名、2年1名)

今年のような内容ならやめたほうがいい (2年2名)

5. まとめ

校舎の耐震工事や複数の教員の異動等、さまざまな事情が重なった上に、イベントの規模や内容、学生の運営体制など、5年目にしてすべてが大きく変わった 2018年度の KJC ランドだった。

それだけに、昨年の KJC ランドを経験している 2 年生による不満は大きかった。不満から出た意見は、教員として深く頷ける貴重なものから、2 年間の学生生活の中では育てきれなかったという悔いを感じるものまでさまざまであった。教員サイドとしても、中心となった教員は新任のため、年間の学校生活の流れがまだ把握しきれておらず、学校や学生の動向がわからないため、見通しが立たない中で準備を進める難しさがあった。準備期間が短いことや、教員それぞれが外勤や出張により不在となることがしばしばあった等の事情から、教員同士の周知や共通理解もままならなかったことは、学生による「先生方も把握していない」

という不満につながった。準備期間の短さに関してはやむを得ない事情があったとはいえ、 これらは学科教員にとって大きな反省点となった。

SNS による学生間の連絡と情報共有は、学生からは高評価だったが、その反面、日常的に LINE を使用してしない教員に対する連絡が滞り、教員側の情報共有が不十分なものとなった。また、準備が最終地点となった1月は、おもに実施にかかわってきた教員の外勤出張が多かったため、学生が質問したいときに教員は不在であるという状況となった。これについては、主担当教員を2名に増やす必要があると考えている。

2018年度は規模を縮小したため、広報の範囲も縮小した。このため、2017年度は600名来場したが、2018年度は200名弱の来場となった。今後の方向性を考える上で、どの程度の規模で行事を行うのが望ましいのかを考えることも課題である。

「KJC ランド」の目的には、寒冷地にある幼児教育学科として、冬の1日を地域の子どもたちが思いきり遊んでほしいという願いがあるが、同時に、学生たちがこれまで授業や実習で学び、身につけたことを実践する場でもある。そのことを考えると、教員側の教育力も問われる場なのではという反省の気持ちも強く残った。

しかし、2年生からは自分たち自身の反省も多くみられ、「もっとよいイベント作りができたはず」という悔しさをにじませる意見や反省もみられた。来年、後輩たちによる実施に向けた改善点も多く指摘してくれた。この調査から、今後の廃止を望んでいないのは、むしろ2年生であることもわかった。

2018年度の KJC ランドはさまざまな問題を抱える中で実施され、課題は多く残った。 寒冷地だからこその遊びの場を設定するなら、ステージ発表鑑賞や工作ばかりではなく、 思いきり身体を動かす場の設定が望ましいといえるだろう。授業の一環として行うなら、 一部の学生が特に尽力するゼミ運営方式よりも、立案から当日まで学生全員がかかわり運 営することが妥当であるとも考えられる。現時点では、次年度も開催する見通しとなって いる。

2018 年度の KJC ランドには日程の設定、規模や内容の見直しなど課題が多く残ったが、 今後の実施に向けて十分に議論していきたい。

2018 年度 KJC ランドの運営を振り返って 第2報

―来場者を対象としたアンケート調査結果から―

穴水ゆかりⁱ・篠木真紀ⁱⁱ・岩野布美子ⁱⁱⁱ・白川和希^{iv}

進藤信子iv·吉川修v·井上薫vi

1. はじめに (調査の目的)

「KJC ランド~子どものあそびの日~」の概要等は、「2019 年度 KJC ランドの運営 を振り返って 第1報」で述べたとおりである。

今年度の KJC ランドは、校舎耐震工事により規模の縮小を余儀なくされた。さらに内 容ばかりでなく運営も、これまで4年間続けてきたものとは大きく変更させた。第1報に みられたとおり、実施後に行った学生たちに対するアンケート調査からはさまざまな意見 や感想等が寄せられ、さらに彼らのさまざまな想いも垣間みられた。

では、保護者や子どもたちは、このイベントに対してどのような期待をもって来場し、 参加した後にはどのような感想をもったのか。今年度の反省と、来年度の KJC ランドの あり方を考えるための一助とする目的から、調査結果をまとめ、考察した。

2. 来場者について

来場者には受付で調査用紙を渡し、玄関に設置した回収ボックスにて回収した。 当日の来場者はおとな96名、子ども102名だった。43名から回収された。

3. 回答から得られた結果

- (1)来場者について
- 1)来場した子どもとその年齢

来場した 38 組のうち、保護者等のおとなに連れられてきた子どもが 1 名だったのは 47.4%、2 名だったのは 50%でほぼ同数だった。3 人の子どもを連れて来場したのは 1 組だ った。

- · 幼児教育学科専任講師
- ⁱⁱ 幼児教育学科専任講師
- ——ⁱⁱⁱ 幼児教育学科教授

- iv 幼児教育学科専任講師
- vii 幼児教育学科教授

回答のあった乳児、幼児、児童の数は59名だった(表2)。例年、工作コーナーではおお むね 3~5 歳を対象として想定して準備しているが、アンケートに応じた来場者では、この 年齢層の幼児はほぼ半数の 47.5%だった。一方、6~11 歳の児童は 33.9%を占めた。幼児ば かりではなく、児童が楽しむことができるアクティビティの準備を検討する必要があると も考えられる。

表1 団体ごとの子どもの数と団体数 人数(%)

一団体ごとの子どもの数	団体数
1名	18(47.4)
2名	19(50.0)
3名	1(2.6)
計	38(100)

表 2 来場した子どもの年齢層 人数(%)

年齢層	子どもの数
0 歳	1(1.7)
1歳	2(3.4)
2 歳	7(11.9)
3 歳	5(8.5)
4 歳	8(13.6)
5 歳	15(25.4)
6 歳	7(11.9)
7歳	5(8.5)
8歳	4(6.8)
9 歳	2(3.4)
10 歳	1(1.7)
11 歳	1(1.7)
14 歳	1(1.7)
回答者数	59(100)

2)来場した成人者とその属性

表3と表4の結果から、約70%の保護者が1人で子どもを連れて来場していると考えら れる。動きの多い乳幼児を連れた保護者が気兼ねなく子連れで来場し、遊ばせられるように 配慮する努力と工夫が今後も必要になるだろう。

一方、子ども連れではない来場者は5名いた。その内訳は保育者3名、その他2名だが、 本学のイベントに注目する保育者等もいるのだということは、学生にとって励みになるこ とでもある。

団体ごとの成人者数	団体数
1名	31(72.1)
2名	12(27.9)
計	43(100)

表 3 団体ごとの成人者の数 人数(%) 表 4 来場した成人者の属性 人数(%)

属性	来場した成人者数
保護者	47(88.5)
保育者	3(5.8)
その他	3(5.8)
計	52(100)

3)来場者が居住する地域

表 5 来場者が居住する地域 人数(%)

居住する地域	回答者
釧路市内	34(87.2)
釧路町	5(12.8)
無回答	4(9.3)
計	39(100)

例年、おもな来場者は釧路市及び釧路町内 で、わずかながら釧路管内からも来場者があっ た。

今年度の来場者も釧路市民 87.2%、釧路町民 12.8%で、ほぼ例年通りであったと推察され る。

(2)広報について

来場者が KJC ランドの開催を知ったきっかけは表6の通りで、幼稚園や保育所で配布されたチラシが約3割、公共施設に依頼したチラシやポスターが約2割、新聞報道も約2割だった。

表 6 このイベントを知った方法(複数回答あり) 回答数(%)

広 報 先	
幼稚園・保育所で配られたチラシ	14(27.5)
学校・児童館のチラシ・ポスター	2(3.9)
公共施設のチラシ・ポスター	9(17.6)
釧路短期大学のホームページ	3(5.9)
ラジオ CM	1(2.0)
新聞	11(21.6)
自治体の広報誌	1(2.0)
友人・知人から聞いた	4(7.8)
釧路短大の学生や教職員から聞いた	2(3.9)
その他	5(7.9)
回答数	51(100)

(3)企画について

自由記述の()内は、その年齢の子どもを連れた保護者を示すものである。

表7 企画の印象 人数(%)

	上赤白、、	まあまあ	あまり	白ノむい	見て	無口於
	大変良い	良い	良くない	良くない	いない	無回答
舞台コーナー	9(20.9)	24(44.8)	6(14.0)	0(0.0)	1(2.3)	3(7.0)
工作	18(41.9)	24(55.8)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(2.3)
休憩室	9(20.9)	19(44.2)	1(2.3)	0(0.0)	7(16.3)	7(16.3)
軽食コーナー	8(18.6)	18(41.9)	2(4.7)	0(0.0)	5(11.6)	10(23.3)
会場装飾	11(25.6)	27(62.8)	2(4.7)	0(0.0)	0(0.0)	3(7.0)
全体	12(27.9)	26(60.5)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	5(11.6)

- ・舞台コーナーはうちの子供達には少し難しかったようでした。(3歳、5歳)
- ・昔話のゼミがあったので昔話の舞台もみたかったな一なんて思いました! (2歳、4歳)

1)舞台コーナーについて

来場者の評価は表7のとおり、「大変よい」20.9%、「まあまあ良い」が半数近い44.8%だった。

自由記述には「昔話ゼミがあるため、昔話の舞台も見たかった」という記述がみられた。 舞台コーナーはゼミではなくグループ主体で行っているが、本校の特色や活動を活かす意 味からも、そのような視点によるテーマ選定も一考する価値があるだろう

2)工作コーナー

表7のとおり「大変よい」41.9%、「まあまあ良い」55.8%と高評価だった。コーナーそのものについては「色々な種類のおもちゃを楽しく作ることができてとても良かったです。(3歳、5歳)」「色々な制作があり、子どもたちがとても楽しんでいた!! (3歳、6歳)」等といった感想も複数みられた。評価は高かったが、来年の企画運営にかかわる課題を示す感想もいただいた。

表 9①で保護者の方からご指摘いただいたとおり、実践面での未熟さもみられた。担当した 1 年生は実践経験がほとんどなく、半日間の見学実習に数回行ったのみのため、子どもとの実践的なかかわりの中で気づきや学びを得る機会となった。ただ、来場者が少なかったため、「3 つまで」とした工作の数の制限については臨機応変に対応することもできたのではないかという反省もある。

臨機応変さについての反省は、表 9③のコメントからも出てきた。進行にメリハリをつけ、 混乱等が生じないようにとのことで、舞台の時間と工作の時間を交互に設定した。舞台が始 まるときには、工作をしている子どもに中断させていたようだが、でき上がるまでは製作を 続けてもよい状況もあったのではないかと考えられるが、真面目な学生ほど、決まりを守ろ うとしたのかもしれない。会場にいた教員も気づくことができなかったが、臨機応変な動き と配慮を学生たちに身につけさせることも課題となった。

規模の縮小に対する不満の声は複数の来場者からみられたが(後述)、規模縮小によって これまで複数の教室を使用していた工作コーナーを、体育館の 1 か所に集めたことに対し ては好意的な意見もあった(表 9②)。

①工作遊びについて

- ・つくれる工作のサンプルがかざってあるコーナーがあれば、それを見ながら「どれをつくりたい?」と会話できたのにな…壁面ポスターだけでは伝わらなかったのか? お友達のつくってた (ママ) タコだけつくると言い、あとは作りませんでした。(1歳、4歳)
- ・工作を楽しんで作れて良かったです。わかりやすかった。作る前にこういうの作るよと見本を見せてくれるとよりわかりやすかったと思います(2歳)
- ・工作が6つあるのに3つまでと言ってたけど(ママ)子どもは作りたいと思います。(5歳、5歳、7歳)

②コーナー会場について

・前回より、工作等が一箇所に集まっていて利用しやすかった

③舞台コーナーとの兼ね合いについて

- ・工作コーナーが舞台を観た後なので1つしか、だめと言われあまり遊べなかった。(6歳、9歳)
- ・舞台の時間、工作の時間が決まっていて、子供の興味がなくても、見ないといけないのが辛かった。年齢 差があるので同時にしてもらえると助かる。(4歳、8歳)
- ・工作が舞台の空き時間にしかできないのでそれがつらかったです(3歳、5歳)
- ・舞台の間工作コーナーが中断してしまうのが残念でした。(1歳、4歳)

3)企画、会場、その他

企画については、昨年まで設置していた迷路がなかったことを残念に感じたという意見が複数あった。また、ゲーム大会やクイズラリーなど、体験型の遊びが欲しかったという声もあった。

アンケートにも「冬場のあそばせる所にいつも悩んでいた」という記述にもみられるとおり、寒冷地である釧路市で、冬に KJC ランドを実施する意義のひとつとして、外出や身体を動かす機会が少ない冬に、遊び場を提供することが挙げられる。学びの実践という観点からも、学生と子どもがともに身体を動かすコーナーの設置を検討する必要があるだろう。ただ、学生からの意見にもあったが、インフルエンザ流行期に多くの子どもが集まるイベントであるということは、活動の内容を考える際にも考慮するべきなのかもしれない。

また、来場した乳児・幼児の年齢層の項でも述べたとおり、本イベントはおもに 3~5 歳を想定して企画しているが、来場した子どもの 30%以上は小学生だった。きょうだいのためにつきあいとして来場した子どもも含まれるのかもしれないが、対象年齢の幅を広げるか、または広報の際に対象年齢を明記することも、次回に向けて考える余地はあるだろう。

会場については、夜警の協力により明け方から電熱器やストーブを使用して会場をあたためていたが、真冬の古い校舎では限界があった。また、子どもは靴を脱いだほうが動きやすいのではという学生の配慮から、前日にウレタン製の敷物を水拭きして準備していたが、一部の来場者に対しては裏目に出たようだ。なお、今年度は午前中のみのイベントであることから、パンやお菓子などの軽食のみを販売したため、休憩室以外に飲食スペースは準備していなかった。販売コーナーにあったテーブル 2 つを撤去せずに残しておいたため、かえ

って来場者から不満があったのだとも考えられる。 規模の縮小については、過年度も来場 していた保護者にはさびしいものに映ったようだ。

表 10 企画、会場、規模、その他(自由記述)

①企画について

- ・冬場のあそばせる所にいつも悩んでいたのでこのようなイベントをやってくれるとやっていただける と親子共にありがたいです! 学生さんがんばってください! (4歳、6歳)
- ・迷路を楽しみにしていたので残念。(3歳、5歳)(4歳、8歳)
- ・おばけやしきがあった方がいい。(7歳、11歳)
- ・クイズラリーとかあってもたのしいかも。(7歳、11歳)
- ・ゲーム大会など、子どもが体を使えるコーナーもあったら楽しいかな? って思いました。(5歳)
- ・子どもが体を使って遊べるコーナーがあれば良いと思います(2歳。5歳)
- ・工作ばかりより、体験して遊んだりできるものがあると良かったです。(4歳)
- ・昨年のようなこともして欲しかったです。(4歳)
- ・幼児向けだったので、小学生の孫にはつまらなかったようです。(8歳)

②会場について

- 舞台を見ているとき寒かったです。
- ・会場が寒かったです。靴を脱ぐと寒さが増したので、防寒をもう少し考えてほしかったです。
- ・くつのぬきはぎが多く大変でした。
- ・上靴をはかないと靴下が黒くなった。結構汚れている? 工作コーナーにかんばんなど置いて何のコーナーか分かるようにしてほしい→ (壁側ではなく、手前に。)
- 飲食スペースの座るイスが少なかったです。

③イベントの規模

- ・去年から見るとだいぶ簡素化された感じがして少し残念でした。
- ・例年より規模が大幅に縮小された印象でした。学生さんの負担等を考慮すると仕方ないのかなと寂し く思いました。
- ・年々ショボくなって残念。(6歳、8歳)

④その他

- ・1つだけきになることはこの時期はインフルエンザ流行期と重なるので…。
- ・挨拶がない。保育士を目指しているなら。来場者みんなにするべきだと。

「挨拶がない」という苦言もあったが、表 11 のとおり、学生にとって大きな励みとなる 言葉も多くいただいた。

- ・未来の先生がんばって!ありがとう。」準備大変だったと思いますが皆さん良い先生になってください
- ・たのしかったです
- ・保育士はとても大変なお仕事だと思います→毎日感謝してます。
- ・学生さんたちが皆優しくてとても良かったです。来年も来ます。
- ・学生さんがいろいろと工夫して発表している姿がとても良かったです。
- ・ありがとうございました。頑張って保育士や幼稚園の先生に向かって勉強してほしいと思いました。
- ・学生さん、優しく接していただきありがとうございました。
- 子どもも楽しんでいました。
- ・ありがとうございました。
- ・学生さんの雰囲気とても良かったです。

4. 終わりにかえて

っては本イベントの前後に定期試験があ -り、1年生ではさらに翌々週に5日間の見 学実習が控えているという過密スケジュ ールの中で行われているイベントである。 しかし一方では、表 12 のとおり「このイ ベントにまた来たいと思うか」という質問 -に対して、「ぜひまた来たい」という回答は -53.5%で、「まあまあ来たい」という 37.2% -

ぜひ来たい	23(53.5)
まあまあ来たい	16(37.2)
あまり来たくない	2(4.7)
来たくない	1(2.3)
無回答	1(2.3)
計	43(100)

を上まわった。つまり約9割の90.7%から「また来たい」という回答を得た。

実施の時期や運営、規模など、多くの問題をかかえている「KJC ランド」だが、冬の遊 びの場としての需要があり、例年楽しみに来場される保護者や子どもたちがいることが、こ の調査結果からわかった。KJC ランドの今後のあり方については、学生を含めた学科内で 十分に議論し、検討していきたい。

2018 年度 KJC ランドの活動内容(報告)



今年で5回目となった「KJCランド~こどものあそびの日~」。

本学幼児教育学科の学生たちはみな、子どもが大好きです。舞台裏ではいろいろあったとしても、来場したお子さんたちの笑顔がなによりうれしい1日となりました。

工作コーナー

ブース形式の工作コーナーでは、6種類の工作を準備して子どもたちと簡単な工作をしました。想定する対象年齢はおおむね3~5歳です。

担当する1年生にとっては実習前に子どもとかかわる貴重な機会になっています。







舞台コーナー

保育の5領域(健康・人間関係・環境・言葉・表現)をベースとした、2年生による創作 劇です。12月に本学附属・系列の幼稚園で実践した内容を改善して発表しました。







休憩室·授乳室

休憩室には木のおもちゃや絵本、紙芝居、ぬいぐるみなどを用意し、ゆっくり遊びながら休むためのスペースにしました。授乳室には親子がくつろいだ時間を過ごすことができるように、白を基調とした装飾の部屋にソファやおむつ台、ぬいぐるみなどを設置しました。担当の学生たち企画、設置、装飾をしました。







会場装飾

会場装飾は、担当の学生と造形ゼミが中心となって行いました。昔話ゼミと学生会から 装飾品の提供を受けて、より充実したものとなりました。







軽食販売コーナー

今年度は「大きな木」「ひかり自立センター」「ステップ」から出張販売のご協力をいただきました。このコーナーは来場者のために設置していますが、学生や教職員も毎年楽しみにしています。









執筆者・研究協力者

井上 薫(釧路短期大学 幼児教育学科長·教授)

岩野 布美子(釧路短期大学 幼児教育学科 教授)

進藤 信子(釧路短期大学 幼児教育学科 教授)

吉川 修(釧路短期大学 幼児教育学科 准教授)

穴水 ゆかり (釧路短期大学 幼児教育学科 専任講師)

篠木 真紀(釧路短期大学 幼児教育学科 専任講師)

白川 和希(釧路短期大学 幼児教育学科 専任講師)

竹ヶ原康弘(北海道教育大学釧路校 非常勤講師)

釧路短期大学 幼児教育学科 実践報告 第2号

2019 (平成 31) 年 3 月 30 日発行

発行所 学校法人緑ケ岡学園 釧路短期大学 幼児教育学科 〒085-0814 北海道釧路市緑ヶ岡 1 丁目 10 番地 42 号 La. 0154-41-0131 (代表)